

Y a m e
八女市内遺跡群 1 3

福岡県八女市緒玉所在 水洗遺跡発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第120集

2017

八女市教育委員会

Y a m e
八女市内遺跡群 1 3

福岡県八女市緒玉所在 水洗遺跡発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第120集

2017

八女市教育委員会

序

八女市の西部において実施された八女南部県営ほ場整備事業を契機として発掘調査が行われ、おおくの遺跡が知られるようになりました。現在においても埋蔵文化財が多数存在しているものと推察され、これらの保存と周知は八女市が取り組まなければならない重要な課題となっています。

今回の報告は緒玉地区での八女南部第二地区県営ほ場整備事業にともない発掘調査された成果を公表するものです。平成2年度に行われた発掘調査について未報告となっていたものを含め再検討を行いました。2200年ほどまえの弥生時代中期を中心とした遺構・遺物が主に見つかっております。先人の暮らしぶりを知っていただき、今なお地下にねむる埋蔵文化財に対し、文化財愛護の思いを育んでいただくことを目的としております。

八女南部県営ほ場整備事業により順次刊行してきたものやこの後も順次刊行していく予定の発掘調査報告書が文化財の保護や普及の一助となり、郷土の歴史を知ることを通して今まで以上に郷土愛の心を育むことに寄与できれば幸いです。

最後に、発掘調査や報告書作成にあたりご協力いただきました関係各位、地元の皆さま、ご指導・ご助言いただきました方々に感謝の意を申し上げます。また今後とも文化財行政にご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

平成29年3月31日

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

例言

- ・ 本書は八女市南部第2地区県営圃場整備事業にともなう八女市緒玉字水洗に所在する水洗遺跡の発掘調査報告書である。
- ・ 発掘調査は八女市教育委員会が実施した。
- ・ 使用する方位は磁北を基準とし、高さは標高で表している。
- ・ 遺構の名称や番号は調査時のものを使用し、Ⅰ区・Ⅱ区のあいだで重複するものについては遺構番号の後ろに（ ）で示した。同区の中で重複するものについては新たに番号を付すことはせず言葉による表現にとどめた。
- ・ 使用した現地測量図は発掘調査時の調査担当を中心として発掘調査の参加者が作成している。本報告では理解補助のため写真を参考に加筆・修正しているところがある。
- ・ 遺物実測図は旧岩戸山歴史資料館において平成7年度から8年度にかけて作成したものを本書作成時に再検討し、加筆・修正を加えた。
- ・ 使用した現地写真は調査担当者が撮影している。
- ・ 執筆、編集、遺物の撮影は多賀が行った。
- ・ 発掘調査時の測量図、写真等の記録、出土遺物は八女市教育委員会で収蔵・保管している。有効な活用を望む。

本文目次

1	調査の経過	1
	(1) 調査にいたる経緯	
	(2) 調査体制	
2	遺跡の位置と環境	2
3	調査の成果	3
	(1) 発掘調査の概要	5
	(2) 遺構と遺物	6
	(3) 総括	55

插图目次

第 1 图	周边遗迹分布图	3
第 2 图	调查区位置图	4
第 3 图	遗构配置图	5
第 4 图	SB01 实测图	6
第 5 图	SB01P1・SB02 遗物实测图	7
第 6 图	SB02 实测图	7
第 7 图	SB02 遗物实测图	9
第 8 图	SB02 遗物实测图	10
第 9 图	SB03 SK03・04 实测图	11
第 10 图	SB03・34 遗物实测图	12
第 11 图	SK03 遗物实测图	13
第 12 图	SK03・04 遗物实测图	14
第 13 图	SB34 SK38(Ⅰ区)・39(Ⅰ区)・40(Ⅰ区)・41・42・43 实测图	15
第 14 图	SB35 实测图	17
第 15 图	SB35 遗物实测图	17
第 16 图	SB36 实测图	17
第 17 图	SB37 SK52 实测图	18
第 18 图	SB36・37 遗物实测图	18
第 19 图	SB37 遗物实测图	19
第 20 图	SB38 SK51 实测图	21
第 21 图	SK51 遗物实测图	21
第 22 图	SB04 实测图	22
第 23 图	SB04 遗物实测图	22
第 24 图	K 01 SK08 实测图	24
第 25 图	K 01 遗物实测图	24
第 26 图	SK08 遗物实测图	24
第 27 图	K 02 实测图	25
第 28 图	K 02 遗物实测图	25
第 29 图	SD01 SK17・39(Ⅱ区)・35 P 08 实测图	26
第 30 图	SK17 遗物实测图	26
第 31 图	SD03・04 SK30(Ⅰ区)・37(Ⅰ区) 实测图	27
第 32 图	SD05 SK46・47・48・49・50 实测图	28
第 33 图	SD05 SK46 遗物实测图	28
第 34 图	SX01 SK02 P 09 实测图	30
第 35 图	SX02(Ⅰ区) SK56・57・58・59・60・61・62 实测图	31

第 36 図	SX01・02(Ⅰ区)・03(Ⅱ区) SK02・58・60・63 P 10 遺物実測図	31
第 37 図	SX02(Ⅱ区) SK33・36・37(Ⅱ区) 実測図	33
第 38 図	SX03(Ⅰ区) SK62・63・64・65 実測図	34
第 39 図	SX03(Ⅱ区)・04 P 01・10 実測図	35
第 40 図	SK01・34・38(Ⅱ区) 実測図	36
第 41 図	SK01 遺物実測図	37
第 42 図	SK34・38(Ⅱ区) 遺物実測図	38
第 43 図	SK05・06・07・09・10・11・12・18 P 11・12・14 実測図	40
第 44 図	SK05 遺物実測図	41
第 45 図	SK05 遺物実測図	42
第 46 図	SK06・07・09 P 14 遺物実測図	43
第 47 図	SK13・14・15・16 実測図	45
第 48 図	SK16 遺物実測図	46
第 49 図	SK19・20・21・23・25・26 実測図	48
第 50 図	SK19・21・22・24・25 遺物実測図	49
第 51 図	SK22・24・26 P 06・07 実測図	49
第 52 図	SK27・28・29・30(Ⅱ区)・31・32 実測図	51
第 53 図	SK28・29・30(Ⅱ区) 遺物実測図	51
第 54 図	SK35・44・45 実測図	53
第 55 図	SK40(Ⅱ区) P 02・03・05・16・17 実測図	53
第 56 図	SK53・54・55 実測図	54
第 57 図	SK53 遺物実測図	54
第 58 図	表採 出土遺構不明遺物実測図	55
第 59 図	時期別遺構配置図	56

表目次

表 1 遺物観察表 1～6	57 - 62
---------------	---------

図版目次

図版 1	64
1. 調査地全景	2. Ⅱ区全景
図版 2	65
1. Ⅱ区全体風景	2. Ⅱ区全体風景
3. SB01	4. SK03・04
5. SB02	6. SB02 遺物

7. SB03	8. SB03 遺物	
図版 3		66
1. SB34・SK41	2. SK38(Ⅰ区)	
3. SK42・43	4. SB36	
5. SB35	6. SB35 遺物	
7. SB37	8. SB37 遺物	
図版 4		67
1. SB38	2. SK51	
3. SB04	4. SB04 炉	
5. K 01・SK08	6. K 01	
7. SK17	8. SK39(Ⅱ区)	
図版 5		68
1. K 02	2. K 02	
3. K 02	4. SD03・SK30	
5. SD05	6. SK46	
7. SX01・SK02	8. SX02(Ⅰ区)SX03(Ⅰ区) 周辺	
図版 6		69
1. SK61	2. SX02(Ⅱ区)・SK37	
3. SK33	4. SK36	
5. SX03(Ⅰ区)	6. SK62	
7. SK63	8. SK64・65	
図版 7		70
1. SX03(Ⅱ区)	2. SX04・P 10	
3. SK01	4. SK34	
5. SK38(Ⅱ区)	6. SK05	
7. SK06・12	8. SK09・10	
図版 8		71
1. SK16	2. SK21	
3. SK25	4. SK22	
5. SK28	6. SK29・30(Ⅱ区)	
7. SK53	8. 作業風景(Ⅰ区)	
図版 9～13 遺物		72 - 76

1 調査の経過

(1) 調査にいたる経緯

昭和57年度より八女南部第一地区県営圃場整備事業が実施された。引き続いて三河地区全域の農用地を対象に八女南部第二地区県営圃場整備事業が昭和63年度に始まり、これを受けて八女市教育委員会と八女南部土地改良区が協議を行った。事前調査の結果、遺跡が広範囲に及ぶことが分かった。そこで圃場整備により土地が削平・掘削を受ける箇所において遺跡の記録保存を目的として発掘調査を行い、削平・掘削を受けない箇所においては現状保存されることになった。

当遺跡では平成2年度に国庫補助事業として発掘調査を行った。酒井田・緒玉の集落の間ではほかに京田遺跡・二反田遺跡・野田遺跡・宮ノ前遺跡・石町遺跡・深田遺跡・池上遺跡・鳥井遺跡などの発掘調査が行われた。

(2) 調査体制

【平成2年度】（現地調査時）

（調査主体）

八女市教育委員会

	教育長	坂田 不二夫
社会教育課	課長	小野 勝輝
同	課長補佐	大月 重信
同	係長	下川 文比古
同	係員	梅野 満、井手 勇一、平嶋 芳子、赤崎 敏男
同	嘱託	鹿田 昌宏

【平成28年度】（整理作業・報告書作成・刊行）

（調査主体）

八女市教育委員会

教育長 西島 民生

（調査統括）

八女市役所（新社会推進部文化振興課 文化財保護係）

新社会推進部	部長	室園 哲也
文化振興課	課長	栗秋 克彦
文化振興課		
文化財保護係	係長	中川 寿賀子（調査統括）
同	係員	永田 寧（整理・報告書担当）
		檀 佳克（整理・報告書担当）
		渡部 真弓
	嘱託	多賀 晴司（本報告担当）

2 遺跡の位置と環境

八女市は福岡県南部に位置している。平成18年に上陽町、平成22年に立花町、黒木町、星野村、矢部村との合併により、県下で2番目に広い自治体となった。東は大部分日田市と南は熊本県山鹿市と接している。北に耳縄山地、八女丘陵、東に釈迦ヶ岳山地、南に筑肥山地に囲まれ、矢部川水系の上流域から中流域に及ぶ。東の山間部では林業のほか文化的景観としての棚田がみられ、中山間部から段丘部で茶畑が広がるさまは整美である。段丘上や低地では稲作のほかいちご・なし・ぶどうなどの果実の栽培や、とくに電照菊をはじめとした菊の生産は盛んである。当遺跡と周囲では現在水田が広がっている。

当遺跡は大字緒玉字水洗にある。花宗用水と矢部川にはさまれた地域は全体として南西に傾斜する地勢で、当地は地形上では扇状平野に分類されている。北西に用水をはさんで緒玉の集落と、西に接している二反田遺跡・宮ノ前遺跡はおおむね自然堤防に分類されている。圃場整備前の昭和40年測量の1:2500八女市都市計画基礎図によると緒玉の集落との間は用水に沿って低い水田が連なり谷状になっており、現在でも集落が明瞭に一段高いことがわかる。当調査地においてもⅡ区北西部は用水に近くなると標高が低くなる。

谷状の低地は当遺跡の北付近で緒玉の集落に沿って北に伸びるもののほか、北東方向に伸びていくものがある。この間に野田遺跡があり当遺跡から北北東に約200mの距離である。野田遺跡では当調査区ではほとんど遺構がない弥生時代後期の墓域があり、32号土壌墓から鉛製の銚が出土している（『八女市岩戸山歴史文化交流館 常設展示図録』平成27年11月28日）。南東に約140mの宿町遺跡は当調査区と同様の扇状平野に位置し、弥生時代前期後半から中期前半の竪穴建物・貯蔵穴のほか径約40mの一重環壕が見つかっている（『八女市市内遺跡群7』八女市文化財調査報告書第111集）。八女市では同時期の環壕は亀ノ甲遺跡、立野・大坪遺跡からも見つかっている。北東から東には接して二反田遺跡と宮ノ前遺跡がある。弥生時代中期から古墳時代前期の200軒ちかい竪穴建物をはじめ掘立柱建物や土坑など非常に多くの遺構があり、継続した集落と考えられている（『八女市市内遺跡群9』八女市文化財調査報告書第113集、現場説明会資料 平成3年2月9日）。当遺跡は同時期の遺構が比較的散漫に見つかっている。隣接することからも宿町遺跡・二反田遺跡・宮ノ前遺跡の集落の外縁部が想定される。

当遺跡から北東へ250mのところ深田遺跡・京田遺跡があり、弥生時代後期から古墳時代前期の集落と、特に深田遺跡では四隅と二辺に突出部をもち、規模が東西70m南北60mの方形環壕が見つかっている。（『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財報告書 1』八女市文化財調査報告書第71集）

当遺跡の周辺域では西に約2kmの新庄に所在する新庄・六反田遺跡では弥生時代中期の集落とともに墓域が見つかっており、122基の甕棺墓・13基の土壌墓・1基の石蓋土壌墓が発見された。集落は弥生時代前期末から古墳時代前期、6世紀後半から8世紀初頭のもので、当調査区と遺構密度の差はあるが同じ時期の遺跡である（『八女市市内遺跡群1』八女市文化財調査報告書第104集）。



- | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|------------|-----------|--------------|---------|
| 1. 水洗遺跡 | 2. 野田遺跡 | 3. 二反田遺跡 | 4. 宮ノ前遺跡 | 5. 宿町遺跡 | 6. 深田遺跡 | 7. 京田遺跡 |
| 8. 石町遺跡 | 9. 鳥井遺跡 | 10. アモメ遺跡 | 11. 国伏遺跡 | 12. 松ノ本遺跡 | 13. 茶ノ木ノ本遺跡 | |
| 14. 袴田遺跡 | 15. 打越遺跡 | 16. 新替遺跡 | 17. 大坪遺跡 | 18. 中里遺跡 | 19. 大坪・前田遺跡 | |
| 20. 川犬古墳群 | 21. 井手口遺跡 | 22. ヒヤケ遺跡 | 23. 宮ノ后遺跡 | 24. 川原遺跡 | 25. 新庄・六反田遺跡 | |
| 26. 篠原遺跡 | 27. 樋の口遺跡 | 28. 亀ノ甲遺跡 | 29. 西山ノ上遺跡 | 30. 岩戸山古墳 | 31. 乗堀古墳 | |

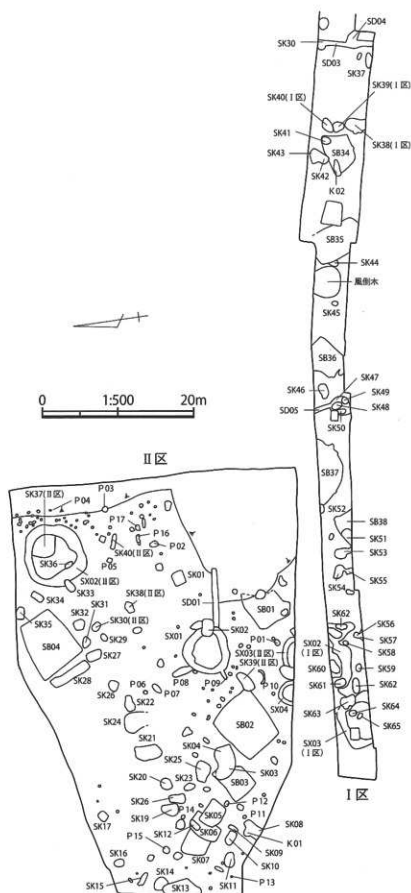
第1図 周辺遺跡分布図

縄文時代では西北西 800 m の国武の大坪遺跡 2 次調査では多量の押型文土器が見つかった（『八女市市内遺跡群 6』八女市文化財調査報告書第 109 集）。また、東南東 1 km の柳瀬にアモメ遺跡があり、縄文時代後期の 22 軒の竪穴住居が見つかった（『埋蔵文化財調査概報 4』八女市文化財調査報告書第 29 集）。矢部川右岸の縄文時代からの足跡が明らかになりつつある。



第 2 図 調査区位置図

3 調査の成果



第3図 遺構配置図

(1) 発掘調査の概要

当調査区は八女市西部の八女市緒玉字水洗にあり字名が由来となる水洗遺跡に所在する。八女市教育委員会により八女南部第二地区県営圃場整備事業にともなう発掘調査が行われた。

I区とII区に分けて調査された。I区は水路として掘削される部分で宮ノ前遺跡とともに調査されている。記録類には宮ノ前遺跡(水洗)と表記されているものがある。平成3年2月9日の現地説明会資料によると平成2年10月末から調査始まり同年12月中旬に調査が終わっている。調査面積は約540㎡である。

II区の調査は平成3年1月から2月に実施された。調査面積は約1750㎡である。I区とII区あわせた調査面積は約2300㎡である。

遺構検出面の高さは標高23～24mの間にありII区の北西隅が低くSK16付近で23.2mである。II区の北辺中央付近のSK28やSB04の北側から東辺のSK14・SK19と北東のSK16・SK17の間には検出面に礫が出てくる範囲があり、この範囲から北西へ標高が低くなる。

発掘調査の結果、弥生時代

の竪穴建物4軒（ほか可能性があるもの2軒）、古墳時代前期の竪穴建物1軒、弥生時代から古墳時代の竪穴建物4軒、弥生時代中期の甕棺墓2基、円形周溝状遺構6基、溝状遺構4条、土坑72基、ほか多数の小穴が見つかった。

（2）遺構と遺物

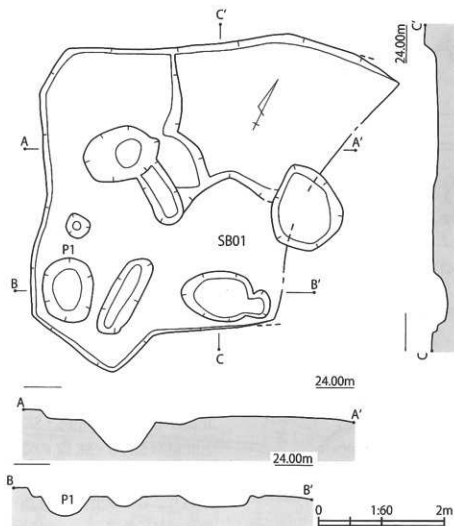
以下に記す遺構と遺物は調査時に付された遺構種類・遺構番号順で主に記載しており、Ⅰ区とⅡ区を分けていない。また、遺構単独での実測図と調査区の部分を切り取った遺構実測図がまじっており、また時期ごとにまとまっているものとまとまっていないものが混在し、理解しにくい構成になっていることをご容赦願いたい。

SB01（第4図 図版2の3 遺物 第5図1・2）

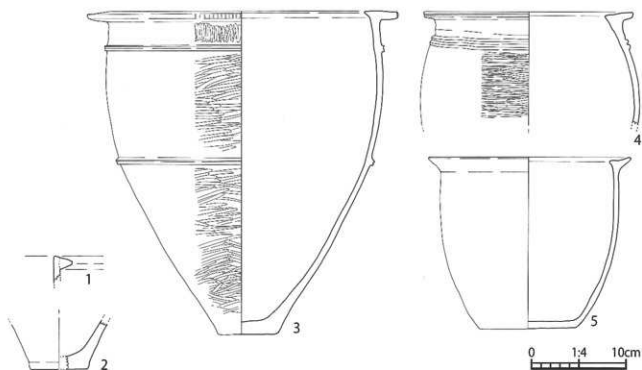
Ⅱ区の南辺中央東より、SD01の南にある。規模は長辺5.5m以上×短辺4.5mの長方形になる竪穴建物である。東側は攪乱を受けている。遺構内に土坑状の落ち込みがSB01P1を含め4基と浅く小さな小穴が見つかった。遺構周囲にも土坑状の落ち込みや小穴があることや、遺構の南隅が広がっているためSB01P1と東の土坑状の落ち込みは

SB01に伴うものかどうか判断ができない。南東辺の断面C-C'にかかる土坑状の落ち込みは配置から伴う土坑の可能性はある。北側の段差は遺構底面の起伏を表現したものである。柱穴や炉跡は見つっていない。

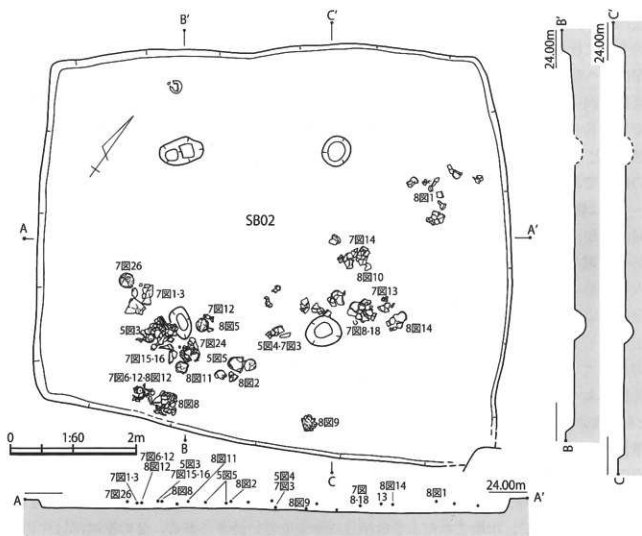
出土した遺物は第5図1・2でSB01P1から出土している。1は甕の口縁部の小片で広く高い突帯が口縁端部に接して貼り付けられている。2は底部片とともに弥生時代前期から中期初頭の遺物である。SB01P1がSB01の遺構に伴うものかどうか不明なためSB01



第4図 SB01 実測図



第5図 SB01P1・SB02 遺物実測図



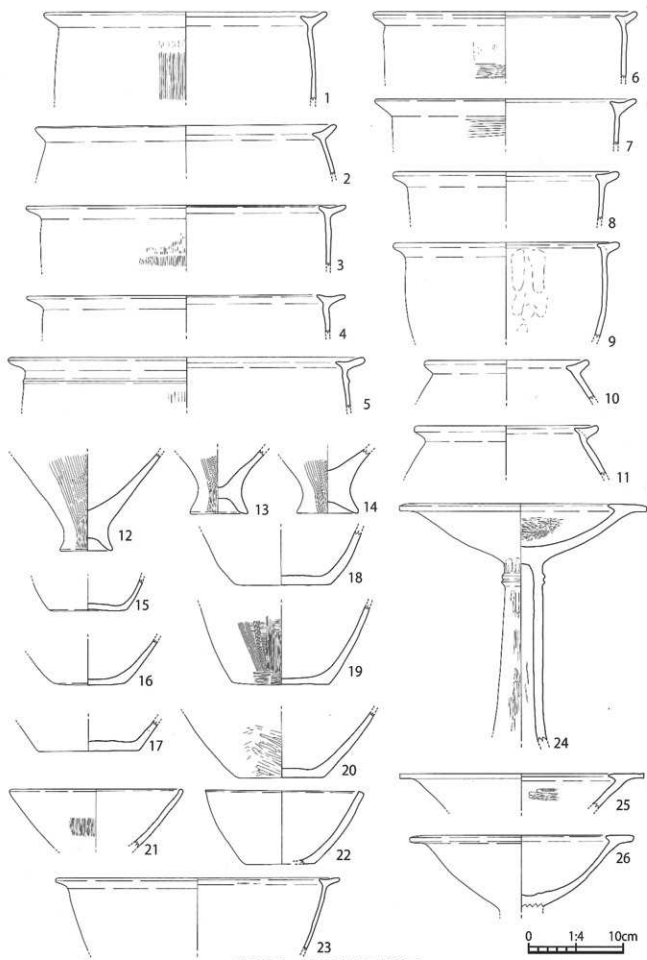
第6図 SB02 実測図

の時期は現地説明会資料より弥生時代としておきたい。

SB02 (第6図 図版2の5・6 遺物 第5図3～5・第7図・第8図)

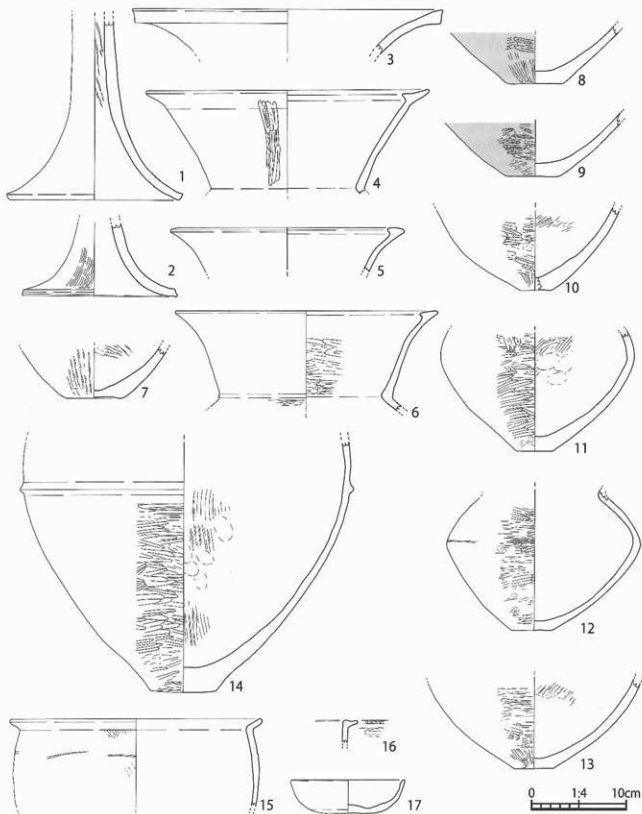
II区の中央南側で、SB03の東SX01の西にある。SK39に切られている。長軸7.6m×短軸5.2mの規模がある。北東辺は5.4mで南西辺がすばまりやや台形状になっている。底面は平らで起伏が少ない。柱穴が4つ見つかっており4本柱の竪穴建物である。柱穴の配置は整然としており2.9m×2.4mとなっている。竪穴の平面形とは逆に長軸に沿う柱間が狭くなっている。柱穴と竪穴の位置は柱穴がやや西にずれている。柱穴の深さは約0.15mと浅い印象を受ける。

多くの遺物が出土している。第5図3は甕である。水簸されたような精良な胎土で赤く焼かれている。口縁下と胴中央付近に2条の突帯がまわる。胴部の突帯は工具を当てていると思われる鋭い稜線を持ちM字状である。外面と口縁平坦部は丁寧にヘラミガキされている。鋤先状口縁端部は面をもち、中に横方向の条線が残るキザミが施されている。第5図4も3と同様であるが胴部が丸みを持ち、口縁がややすばまり突帯より上が直線的に立つことから頸部のように見える。また口縁下の突帯が2段1条になり丸みを持っている。第5図5は口縁幅と器高がほぼ同じであり鉢とすべきかもしれないが甕とした。平らで広い底部から強く立ち上がり胴部上半はまっすぐ伸び外側にやや立つ鋤先状口縁となる。ほかの土器に比べ1～5mmの砂礫が胎土にまじる。第7図1～9は甕の口縁で、鋤先状口縁が内側へ強く張り出し上面がつよく湾曲しているものが多い。口縁下に横方向のナデまたは横方向にハケメを施されている。2・3は外面に煤が付着する。5は低い突帯が1条めぐる。8と9は鋤先状口縁が厚く短く内側への張り出しも小さく上面も平坦である。第7図10と11は口縁がすばまる形状の甕の口縁部である。第7図12～14は脚台がつく甕の底部である。脚台はハの字に開いている。13の内面底は尖るようにくぼむ。第7図15～19は甕の底部で、平たい底から胴部への立ち上がりが急なものである。19はハケメの目が細かく縦、横方向に繰り返して施され丁寧な作りである。第7図20・第8図14は甕である。第7図20はヘラミガキが外面と底面まで強く施されている。第8図14は胴部最大径やや下に1条の三角形の突帯がつき、若干突き出た底部から丸みをもって立ち上がり全体的に球胴に近い形状が想定される。突帯より下は底面まで横方向に強いヘラミガキ、上はナデである。第7図21～23は鉢である。21は器面の状態良くないが外面はハケメのあとナデが施されている可能性がある。22は胎土に砂が多く混じる。口縁部の整形はあまりよくない。23の鋤先状口縁は小ぶりで器壁が薄い。第7図24～26は高坏である。24は浅い坏部に広い鋤先状口縁で脚部が長い。脚上部に断面形が半月形の2条一組の突帯がまわる。水簸されたような精良な胎土で赤い焼きである。器壁厚いが端正な形で、外面の調整は摩耗しわからないところが多いが全面にヘラミガキされていると思われる。25・26は器表が摩耗しているが、24に比べ砂が混じる赤みのある焼きである。第8図1・2は高坏の脚部で、水簸されたような精良な胎土で赤い焼きである。2の裾端部は片切彫り状の沈線であり段状に見える。1と比べ砂が混じる。第8図3～6は壺の口縁から頸



第7图 SB02 遺物実測図

部である。3は口縁端部がやや厚みがあり面をもつ。水簾されたような胎土で赤く焼かれている可能性がある。他の赤く焼かれた土器に比べ明らかに砂礫を多く含む。4～6は口縁内側を肥厚させ鋤先状口縁となる広口壺である。4は頸部に分割と思われる暗文が縦方向に入る。5・6の鋤先状口縁は小さく丸みがある。7～13は壺の底部から胴部で



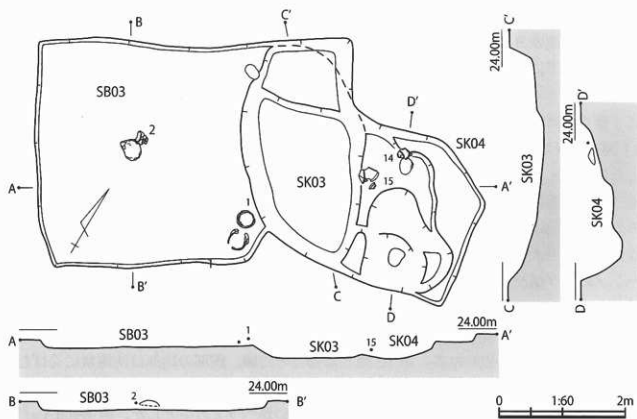
第8図 SB02 遺物実測図

ある。7は形状から壺の底部としているがハケメの目が粗く甕の底部とすべきかもしれない。ほかの外面調整は密にヘラミガキされ単位が不明瞭なところも多い。8～10・13は底面までヘラミガキされている。8・9は外面に丹塗りされている。12は胴部最大径付近に1条の浅く狭い沈線がめぐる。外面は黒い焼きにしていると思われる。13の胴部分は暗褐色であり黒い焼きにしている可能性がある。第8図15・16弥生時代前期の甕の口縁部である。15の口縁は外側に強くやや小さく外反する。沈線は途切れており直線的ではない。2～5mmの礫を多く含む。16は厚みが薄く長い突帯が口縁端部に接して貼り付けられている。17は土師器の坏で古代の遺物である。底部はヘラ切りでヘラおこし痕がある。2分の1の残存で浅い古代の遺構がかかっていた可能性がある。これらの遺物からSB02の時期は弥生時代中期中葉から後葉と考えられる。

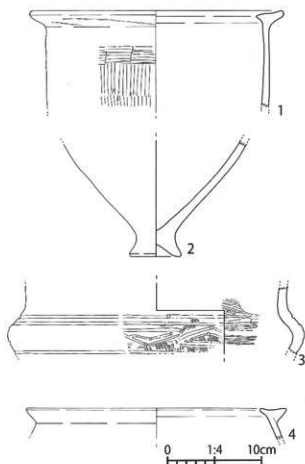
SB03（第9図 図版2の7・8 遺物 第10図1～3）

Ⅱ区の南西部、SB02とSK05の間にある、長辺5m×短辺3.6mの長方形を呈する竪穴建物である。SK03との切りあい関係は不明である。SK03とかさなっているためSB03の東隅の状況が分からないが、遺物のある辺りから内側に曲がることから北隅の張り出しあるいは東隅にベッド状遺構があった可能性がある。底面はおおむね平坦である。

出土遺物は第10図1～3である。1と2は弥生土器で1は竪穴の東で口縁を下向きに伏せたような状況で出土している。1の甕はまっすぐな胴部から鋤先状口縁となる。内側への張り出しはくちばしのような形となっている。砂を多く含み表面が粗い印象を受け



第9図 SB03 SK03・04 実測図



第10図 SB03・34 遺物実測図

る。口縁部の胎土の継目が明瞭なところがあり下から口縁をみると渦巻き状をしている。2は中央付近から出土した甕の下半である。脚台は比較的強くハの字状に開き、内面底は突出するようにとがる。3は縄文時代の鉢で、沈線の間の胴最大径付近に二重の三角形を反転し並べたような文様構成で、二重の三角形の外側や内側全体の擬縄文地を磨り消している。三角形の頂点部分や屈曲するところに刺突文を施している。1と2からSB03の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

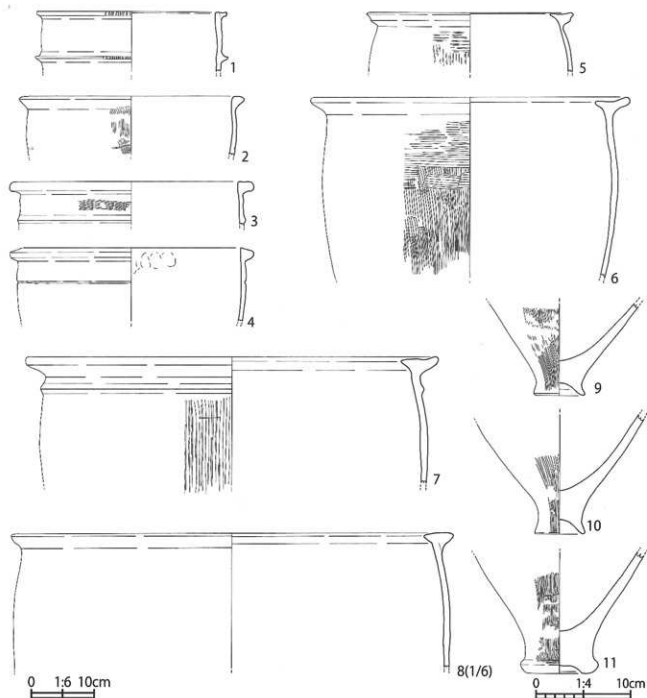
SK03・SK04 (第9図 図版2の4 遺物 第11図 第12図)

II区の南西部、SB02とSB03の間にある土坑である。SK03とSK04との新旧関係は不明である。

SK03は長軸約3.7m×短軸約2mの楕円形で底の形状は緩やかに丸みを帯びる。

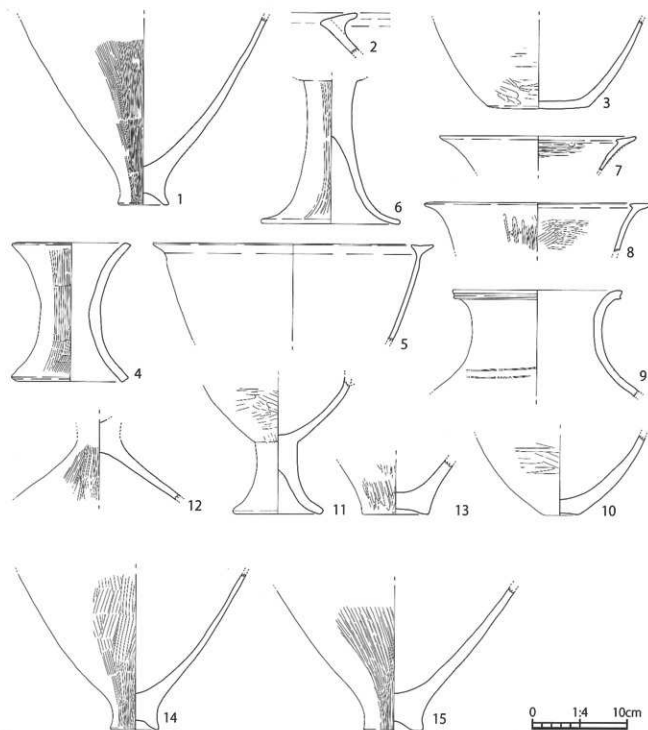
多くの遺物が出土している。第11図1～4は甕の口縁部である。1の口縁と口縁下の突帯は高く、キザミは密に細かく施されている。口縁内側のヨコナデはゆるい。2の口縁の突帯は厚みがある三角形でハケメは目が細かい。口縁下にやや細く浅い沈線を入れる。1と2は歪みと小破片のため復元径の誤差は大きい。3・4の口縁は断面が丸みを帯びた四角形で厚みがある。3は口縁下の突帯は小さく低く4は沈線が1条めぐる。これらは弥生時代前期から中期前葉のものであろう。第11図5～8は甕である。5の鋤先状口縁は外側への拡張部下側が強くナデられ明瞭に段となる。6・7は比較的幅が広い鋤先状口縁となっており、7は口縁のすぐ下に1条の断面三角形の突帯がめぐる。8の鋤先状口縁は内面側への拡張がつよめで、外面側は短く厚みがあり断面は三角形に近い。外面は丹塗のように赤くなっているところがある。復元口径が70cmと大きく縮尺は他と異なる。第11図9～11・第12図1は甕の底部で、9はハケメの目が細かく、10の内面底部は尖り気味である。11の底部は張り出した高台状で、全体的に厚みがある。第12図1の内面底部はとがり、外面ハケメの目は細かい。全体的にみて丁寧な仕上がりである。第12図3は甕の底部で摩耗しており外面調整は平滑ではないがヘラミガキと思われる。第12図4は器台で口縁、底部の端部は沈線状にくぼむ。天地は逆に図化しているかもしれない。第12図5は鉢で器表は摩耗している。第12図6は高坏脚部で摩耗著しく外面調整は平滑さが無いがヘラミガキとした。第12図3・5・6は全体的に赤い焼き上がりとなっている。第12図7は高坏で、砂の混じりが少なく微

細でやや精良である。鋤先状口縁上面は口縁に沿ってヘラミガキされる。器表の剥離が著しい。褐色みが強い部分があり黒い焼きの可能性がある。第12図8～11は壺である。8は外面に等間隔の暗文状に縦方向のヘラミガキが施されている。9の壺は口縁端下位と頸部に近い胴部分に沈線がある。胴の沈線は2条で細く浅い。10は底部で全体的に赤みがある焼き上がりでヘラミガキは強い。11は脚台付の壺である。胴最大径付近に突帯が貼り付けられていた痕跡がある。外面はヘラミガキで全体的に平滑であるが単位は不明瞭とところが多い。第12図12は蓋で全体的に赤みがある焼き上がりである。時期差があると考えられる遺物が複数出土している。第11図1～4は弥生時代前期から中期前葉のものであるが、6や7は中期後半のためSK03の時期は中期後半と考えたい。



第11図 SK03 遺物実測図

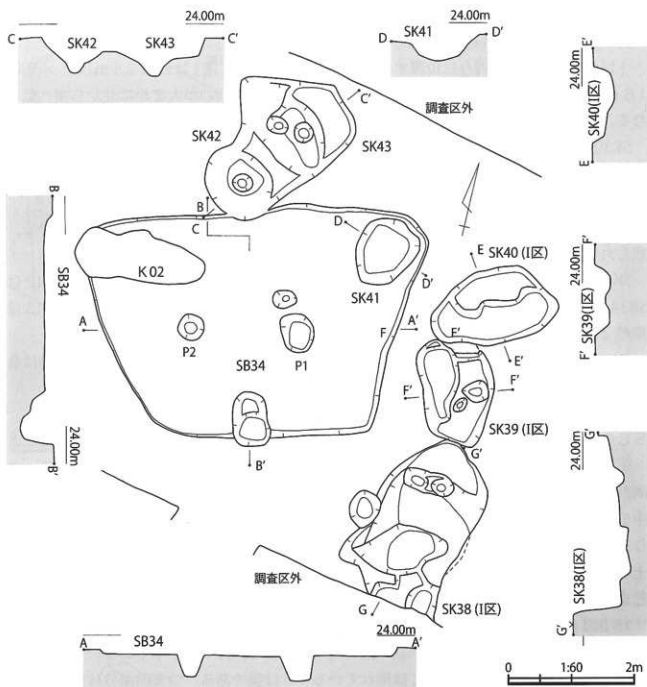
SK04 は不整形な形をしており規模は長軸約 2.5 m × 短軸 2 m で北側から段をもちながら南側が低くなる。全体的な形から人為の掘り込みではない可能性があるかもしれない。第 12 図 14・15 は甕の底部から胴部片で直線的な脚台である。外面のハケメは目が太い。14 の内面底はゆるくとがる。これらから SK04 は弥生時代中期中葉～後葉である。



第 12 図 SK03・04 遺物実測図

SB34 (第 13 図 図版 3 の 1 遺物 第 10 図 4)

I 区の東、SB35 と SD03 の間にある竪穴建物である。台形状をしており長辺 5.4 m、



第13図 SB34 SK38(Ⅰ区)・39(Ⅰ区)・40(Ⅰ区)・41・42・43 実測図

短辺 3.4 m × 短軸 3.7 m である。柱穴 (P1・P2) が竪穴に対して均整に配置されており 2 本柱である。柱穴の間隔は 1.8 m である。南の短辺側中央の壁沿いにある土坑は竪穴から少し外へ出ているが、柱穴間の中央からの垂直線の位置である。配置が整っており SB34 にともなうものと考えておきたい。北隅の SK41 は壁際に収まる位置から SB34 にともなう可能性がある。炉跡は見つかっていない。K 02 は掘削の順序から推察するに SB34 が切りあい関係から新しい遺構である。

第 10 図の 4 は弥生土器の甕の口縁部で SB34P1 から出土している。口縁部の外側への拡張は小さめで断面三角形を呈する。遺構の時期を示すには遺物の量が少ないため K 02 を切ることから SB34 は弥生時代中期以降としておく。

SK38(I区)・SK39(I区)・SK40(I区)・SK41・SK42・SK43
(第13図 図版3の1・2・3)

I区の東部SB34の周りに位置する土坑である。SK38(I区)は長軸2.8m以上×短軸1.6mの規模で南部は調査区外へ続く。図は細かい表現が多いが大まかに北から南へ低くなる。底がやや丸い形状で東側は袋状になる。SK39(I区)との切合いは不明である。

SK39(I区)はSK38(I区)の北に接し、SK40(I区)に切られている。長軸推定1.8m×短軸1.1mの不整な小判形をしている。SK40(I区)はSK39(I区)の北にある。長軸2.0m×短軸1.2mの不整な楕円形をしている。

SK41はSB34の中にあり、長軸1.1m×短軸0.9mのおおむね丸い形状をしている。底も丸い形状である。SB34の北隅に収まっておりSB34に伴う遺構の可能性がある。

SK42とSK43はSB34の北にあり接している。切りあい関係は不明である。SK42はSB34との切りあいも不明である。SK42は径1.2mの円形で底も丸い形状である。SK43は長軸2.0m×短軸約1.5mの不整形であるが、底は概して丸く楕円形をしている。

SK38(I区)・SK39(I区)・SK40(I区)・SK41・SK42・SK43は図化できる遺物はなく遺構の時期は不明である。

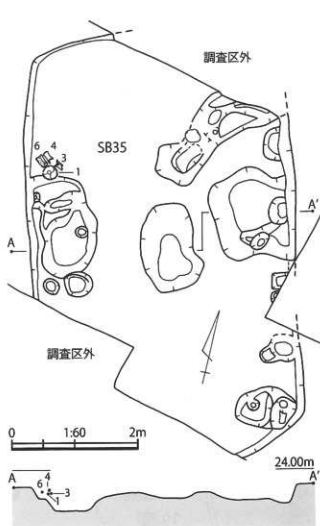
SB35 (第14図 図版3の5・6 遺物 第15図)

I区の中央東寄り、SB34とSB35の間にある竪穴建物である。SK44を切っている。北隅と南隅は調査区外である。長辺推定6.6m×短辺4.1mの長方形を呈する。掘り形は中央が浅く辺が深い。配置から炉跡かと思われる浅い土坑(1.4m×0.5m)が中央にあり、その東西の壁際に土坑がある。東側の長辺に沿って浅い小穴が多い。炉跡の北の細い土坑は調査区外へ続くためSB35に伴うものかどうかは不明である。西辺の土坑の北にまともって遺物が出土している。置かれていたかのように北西―南東方向に並んでいる。

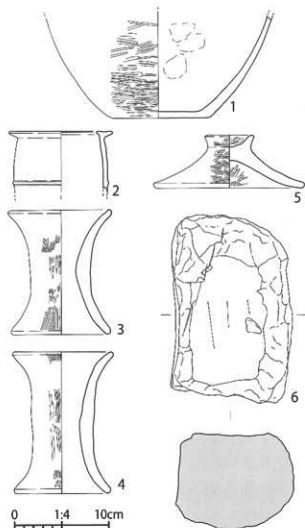
15図1は幅広い底部から丸みをもって立ち上がる甕の底部である。2は鋤先状口縁をもつ小型の甕で胴部に断面が台形状の低い突帯がまわる。作りが丁寧である。3と4は器台で砂礫を多く含む。器面の多くは荒れている。5は蓋である。つまみ部分は丁寧な整形ではない。6は砥石である。石材は石英長石斑岩と思われる。3面が研ぐ面となっており、図化している面がもっとも平滑である。図上の裏面は幅1cmの鑿状の痕があり、やや粗い研磨で、研ぐ面として使用されたかは分からない。2の甕は典型的なものではないが、鋤先状口縁は大きめで内側への出もはっきりしていることから、SB34は弥生時代中期後半ころと推定しておく。

SB36 (第16図 図版3の4 遺物 第18図1)

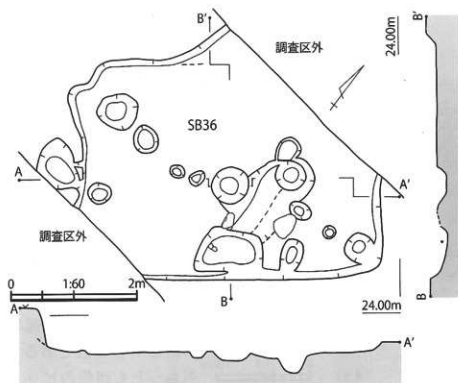
II区の中央、SB35とSB37の間にある竪穴建物である。長辺4.8m×短辺3.5mの長方形をしており、北隅は調査区外へ続く。北東辺は中央で北へ屈折するが写真では遺構下場はまっすぐ伸びているため、北側には別の遺構や落ち込みがあった可能性が高い。南東辺の中央の土坑は約1.0m×0.8mの台形状をしており、配置からSB36に伴うものと考



第 14 図 SB35 実測図



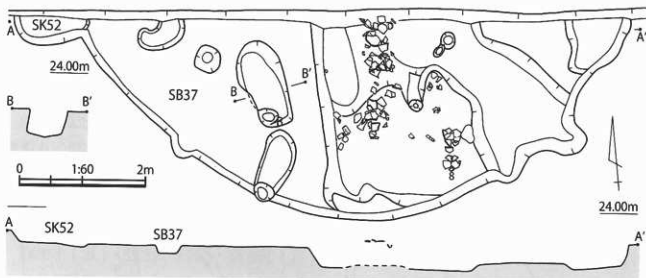
第 15 図 SB35 遺物実測図



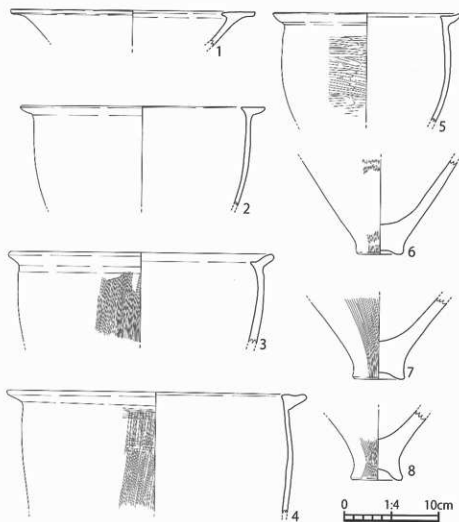
第 16 図 SB36 実測図

えられる。位置から柱穴となりそうな小穴があるが、径が0.2 mと0.4 mで深さ0.15 mと0.3 mで規模が異なり、小穴は遺構内外に同様に広がっているため、柱穴の可能性は低い。断面を示している中央の土坑は、炉跡の可能性はあるが不明としておきたい。ほかにも大小の土坑状・ピット状の落ち込みがあるが帰属は不明である。

第18図1は高坏である。鋤先状口縁は大きく上面は平坦で外側端部は面をもつ。内側へ出もはっきりしている。水簸したような粉っぽい胎土である。弥生時代中期後半の遺物と思われるが、1点のみであり遺構の時期は不明としておきたい。



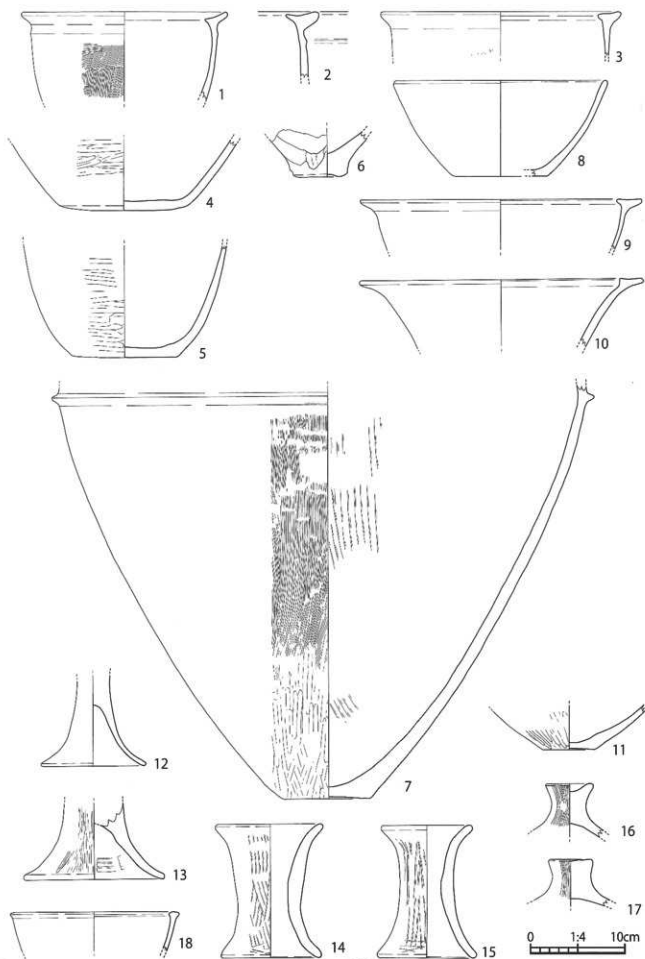
第17図 SB37 SK52 実測図



第18図 SB36・37 遺物実測図

SB37・SK52 (第17図 図版3の7・8 遺物 第18図 第19図)

SB37はⅡ区の中央西寄り、SB36とSB38の間にある。SK52との切りあい関係は不明である。径8.7m以上(推定9.0m程度)の円形の竪穴建物である。環状に廻りそうなピットが4基あり、西から径0.45m・深さ0.39m、深さ0.42m、0.33m、0.54mである。深さは掘り形に起伏があるため比較的平坦な西側の高さからの値である。もっとも西側のピット以外は深い位置から見



第 19 図 SB37 遺物実測図

つかっているため径を出していない。環状に廻るが円形の竪穴の掘り形に対してやや西にずれていることや遺構周囲にも小穴が広がるため、柱穴となる可能性が高いとしておきたい。断面B-B'で示した土坑は深さが0.4 mと長方形に近い形状で掘り込まれている。ただし、柱穴の可能性のあるピットとかさなっており、SB37に伴うものではないかもしれない。中央から東は、0.25 mから0.30 m低くなり底面に起伏がある。この一段下がるところから遺物が多く出土している。出土状況を図化しているものは比較的上位にあるもので土柱として残していた部分からも多くの遺物が出土している。

この遺物が第18図2～8、第19図である。第18図の2～5、第19図1～3は甕の口縁部である。鋤先状口縁の形状はさまざまで、第18図2は上面が平坦、第18図3・第19図1は外側を強く上向にしている。第18図4・5は内面への出は少なく、厚みがあり断面が三角形に近く外側がすこし上向きになる。第19図2は内側への出が大きい。第19図3は第18図4・5に比べ内面への出があり厚い。また、第18図3はハケメの目が細かく、第19図2は口縁すぐ下に1条の小さな赤帯がまわる。第18図6～8は甕の脚台で6は底面のくぼみが小さい。第19図4・5は広く平らな底をもつ甕の底部である。4の底部はいびつで復元径は正確ではない。第19図6は甕の底部であるが脚台というには低く第18図の6に近い形状で、底部の調整は粗雑である。外面底から少し上から内面底部にむけて径2.4 cm以上の孔が開けられている。焼成前の穿孔で丁寧さはない。第19図7は大きな甕の底部から胴にかけてで、胴幅56 cmあり最大径付近に1条の赤帯が廻る。外面は目が細かいハケメ、内面は目が粗いハケメが施される。内面はハケメの上からナデられているかもしれない。第19図8・9は鉢である。8は底から丸みをもって立ち上がり口縁端部を丸く収めている。9は鋤先状口縁で内側への出に厚みがあり上面は平坦である。第19図10は広口壺の口縁部で、残存が悪いが外面は赤みがある橙色している。外面に浅く細い沈線がまわるが石等をヨコナデのときに引いたものとした。第19図11は壺の底部でややいびつである。第19図12は高坏の脚部で、水簸されたような粉っぽい胎土している。第19図13は脚台で調整は外面が密にヘラミガキ、内面は目の幅が広いハケメである。内面は全体的に黒斑状に暗色となっている。第19図14・15は器台で14は特に器壁が厚い。ともにハケメの目の幅が広い。第19図16・17は蓋のつまみ部分で、17のつまみ上面はわずかにくぼむ程度である。16は甕の底部片とすべきかもしれない。第19図18は縄文土器の鉢と思われる。褐色みのある暗色の色調で異質な胎土である。

これらの遺物は弥生時代中期中葉～後葉と考えられるが、SB37は円形の竪穴建物であり、この時期の竪穴建物は方形から長方形が一般的である。上記遺物は中央から東にかけての一段低い部分の中に収まることから、この部分はSB37を切る新しい遺構の可能性を考えておきたい。

SK52はSB37の西にある土坑で、SB37との切りあいは不明である。調査区外へ続き0.6 m以上×1.2 mの掘削した部分は丸みがある四角形をしている。深さは0.2 m程度の丸みがある底をしている。図化できる遺物はなく時期は不明である。

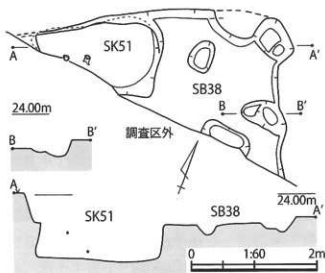
SB38・SK51 (第20図 図版4の1・2 遺物 第21図)

SB38はⅡ区の中央西寄りSB37の西側にある。調査区外へ続いており、4.2m以上×2.7m以上の長方形になる竪穴建物である。北隅はいびつであるが写真を見ると埋土が残っていた可能性がある。土坑状の小穴が4基あるがSB38に伴うものかどうか不明である。図化できる遺物はなく遺構の時期は分からない。

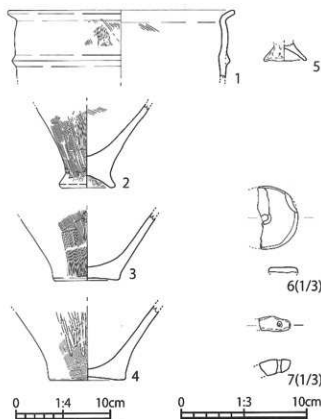
SK51はSB38の北西辺に収まるように位置し、南隅は調査区外へ続く。長軸2.0m×短軸1.2mの丸みを帯びた長方形の土坑である。深さは検出面から0.73mあり底面は比較的平坦で、北西辺は袋状になっている。貯蔵穴であろうか。規模からみてSB38に伴う

ものではなく、掘削の順序からSB38に切られているものと思われる。

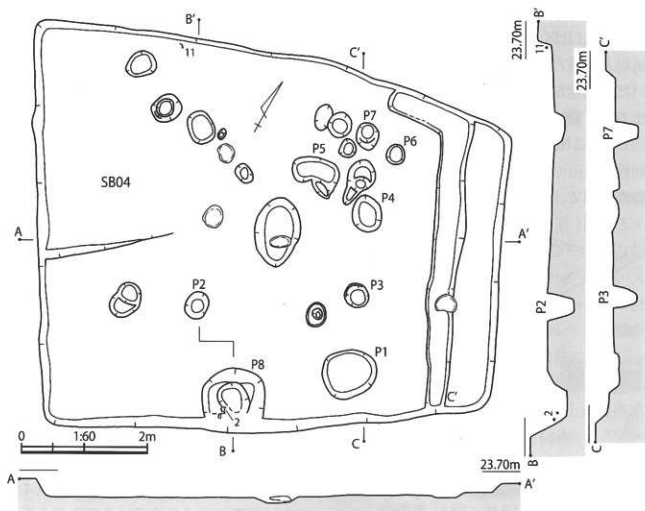
第21図の遺物が出土している。1は甕である。全体的に赤褐色の色調をしており、口縁は外側に折り曲げたような形状である。口縁下の突帯は高く大きい。2～4は甕の底部で、全体的に赤褐色の色調でハケメの目が細かい。2は脚台状の底部からわずかに外反しながら立ち上がる。細い底部で、通有の甕の脚部ではないかもしれない。内面底はとがりぎみである。3・4の底部は平底で、4の底面はヘラミガキが施されている。5は小さな脚台でユビオサエのみで成形されており均整さを欠く。手づくねのミニチュア土器であろうか。6は石製品の紡錘車である。残存が悪く裏面は欠損している。径は5.0cm、孔の径は0.5cmである。孔の形状はつつみ形で上下から擦られて開けられていると思われる。石材は片岩である。7は反りがある棒状の土製品である。反りと平行して焼成前に孔が開けられている。孔は上下から穿った形状をしている。小片のため不明であるが、匙の柄の先端部分であろうか。遺物は埋められたときに入ったものと思われ、点数も4点と少なく直接遺構の時期を示していないと考えられるが、SK51の時期は1～4の土器から弥生時代前期末から中期初頭の遺構と考えられる。



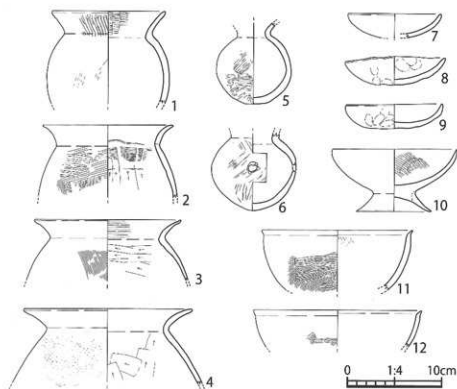
第20図 SB38 SK51 実測図



第21図 SK51 遺物実測図



第22図 SB04実測図



第23図 SB04遺物実測図

SB04 (第22図 図版4の3・4 遺物第23図)

Ⅱ区の北辺中央西より、SX02(Ⅱ区)の西側にある竪穴建物である。長辺7.2m×南西辺6.5m・北東辺4.5mの北隅が狭くなる台形状をしている。小穴が多く見つかったがP2・P3・P7と断面を示したB-B'にかかる北側のものは均整に並んでおり柱穴である。断面B-B'にかかる北側

のものは深さ 0.2 m で若干浅いがほかの小穴に比べて深く、P2・P3・P7 は 0.3 m あり深さからもほかの小穴と区別できる。柱穴間は 2.6 m と 3.0 m で竪穴の長辺に平行する側が短く、直行する側が短くなっている。径はおおむね 0.4 ～ 0.5 m である。炉跡と考えられる土坑が中央にあり大きさは 1.1 m × 0.7 m の楕円形をしている。掘り形底面からの深さは 0.1 m に満たない。石が中から出土しているが炉跡に伴うものかどうか不明である。南東辺の中央東寄りに壁に沿って方形に近い土坑がある。東側に溝状の落ち込みがあり床面に伴うものか掘り形にともなうものか判断しづらいが、南東辺・南西辺とちょうど方形をなす位置にあり、掘り形掘削のときのものであろう。

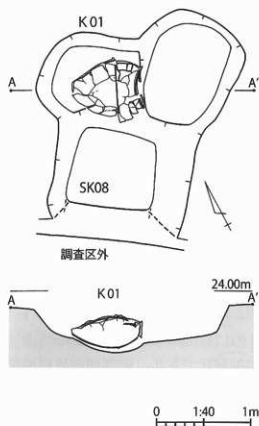
第 23 図の遺物が出土している。1 ～ 4 は甕である。なで肩で口縁部がやや外反する器形である。それぞれ調整が異なり、1 の口縁部はハケメ、胴部外面はナデで下部はハケメが残る。胴部内面は工具によるナデである。2 の口縁部はヨコナデ、胴部外面はタタキで下半はハケメが施されている。胴部内面はハケメのあと屈曲部のやや下までヘラケズリされている。3 の口縁部は外面から端部付近までヨコナデ、内面側はハケメ、胴部外面はハケメで胴部内面は屈曲部近くまでヘラケズリである。4 の口縁部はヨコナデ、胴部外面はタタキでタタキ痕は重複で分かりづらいところがあるが矢羽状である。胴部内面は屈曲部までヘラケズリされている。ヘラケズリが及んでいないところもある。5 は小型の壺の胴部である。外面胴下部は手持ちによるヘラケズリのあと粗くヘラミガキされている。不安定ながらも小さな底面がある。6 は甕で穿孔は欠けているところ多いが焼成前と思われる。胴下半は小さな面の集まりのところが多く調整痕がはっきり残らないがヘラケズリされていた可能性が高く、そのあとに目が粗いハケメが施される。底部は尖底である。7 ～ 9 は皿のような器形の坏である。ユビオサエとナデで仕上げられヨコナデは施されていない。ゆがみの多いものがあるが口径は概ね 10 ～ 11 cm とそろっている。10 は坏で大きくハの字に開く高台状の台がつく。11・12 は深手の坏で口縁端部内側を面とし外側をとがらせている。1 ～ 4 から SB04 の時期は古墳時代前期と考えられる。

K01・SK08 (第 24 図 図版 4 の 5・6 遺物 第 25 図 第 26 図)

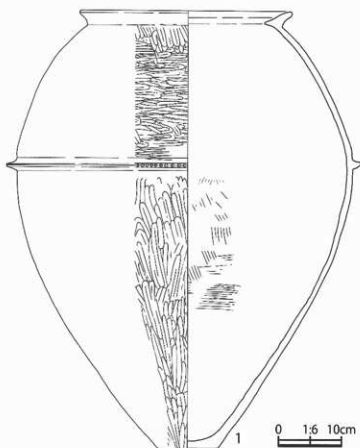
K01 はⅡ区の南西部、SB03 の南西にある甕棺墓である。推定を含めて長軸 1.5 m 以上 × 1.1 m、検出面からの深さ 0.4 m の小判形の墓壇の南西側にさらに甕棺を納める穴を掘っている。甕棺はほぼ水平に置かれ、上半が土圧により割れた状態で出土している。蓋は出土しておらず有機質の蓋がなされていたのだろうか。棺内からの出土遺物はない。

第 25 図 1 は口径・器高に比して小さい底部から直線的にたちあがり、胴部中央付近からまるみをもち、球状の上半から頸部を突出させ傾きがある鋤先状口縁になる。鋤先部分は段状に外面が厚い。胴最大径のところに高さがある突帯を 1 条めぐらし、突帯上に比較的大きく深いキザミを施している。調整は口縁・突帯のぞき底を含め幅が広い工具によるヘラミガキ、内面はナデで部分的に目が広いハケメが施されている。1 から K01 の時期は弥生時代中期中葉から後葉と考えられる。

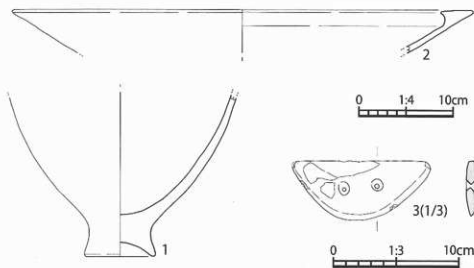
SK08 は K01 の南西にあり、甕棺の下に埋土が残ることから K01 に切られる土坑であ



第 24 図 K 01 SK08 実測図



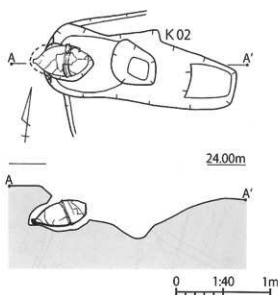
第 25 図 K 01 遺物実測図



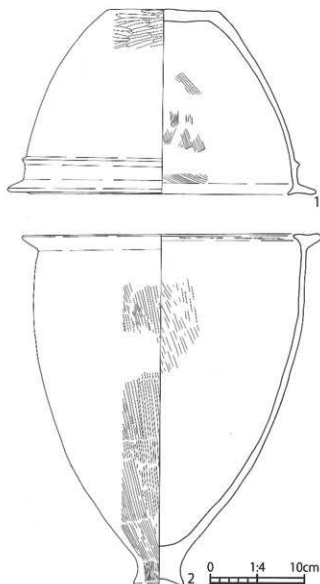
第 26 図 SK08 遺物実測図

る。調査区外へ続き長軸は不明だが幅は 2.9 m、深さは検出面から 0.6 m で台形状の掘り形である。第 26 図の 1 は甕の底部で比較的太い脚台をもち、内側を丸くくぼませる。胴下部も丸みをもった形状である。2 は鉢の小片である。切りあい闊

係や残存から K 01 の蓋とは異なる。3 は石材が片岩の石庖丁である。背はまっすぐで、刃部の中央付近は丸く両辺は直線的な形状をしている。刃は鋭利に研磨され、刃部と持ち手部分の境はあまり明瞭ではなく全面研磨されている。穿孔は前後よりゆるい円錐形にうがち完通されている。背は面をもち角は丸くなっている。面は若干丁寧さに欠ける。表面に古い剥離があるが製作中のものか使用時のどの段階のものかわからない。SK08 の時期は遺物の量が少ないが弥生時代中期中葉から後葉ととらえておく。



第 27 図 K 02 実測図



第 28 図 K 02 遺物実測図

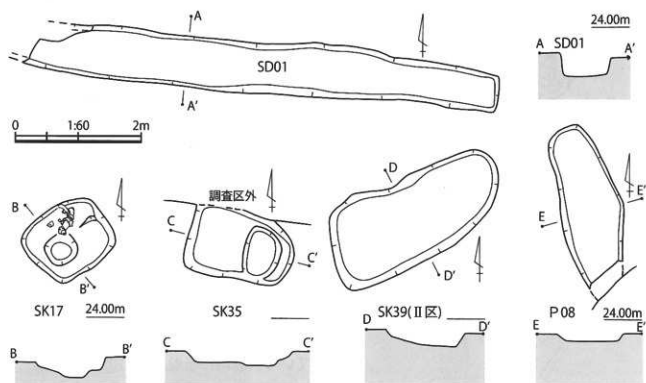
K 0 2 (第 27 図 図版 5 の 1 ~ 3 遺物 第 28 図)

I 区の東部、SB34 の北西隅にある甕棺墓である。掘削の順序から SB34 に切られているものと考えられる。平面形が長辺 1.7 m × 短辺 0.6 ~ 0.7 m の長方形で、長辺側はまっすぐに、短辺側は中央に向かってすり鉢状の墓壇を掘り、西側のほうをさらに棺が納まる程度に穴を掘っているようである。下甕の下半が水平になるように置かれておりやや斜めに据えられている。棺は土圧により割れ若干下へひしゃげているもののほぼ原形を保ったまま出土している。棺内からの遺物の出土はない。

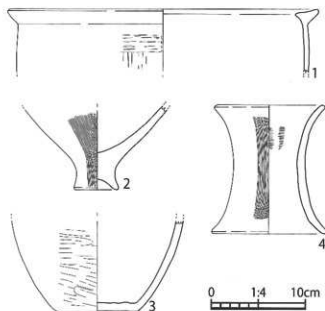
第 27 図 1 は甕棺の蓋で鉢である。鋤先状口縁の内側への出が大きく外側より高くなっている。上面の湾曲強めで比較的広い印象をもつ鋤先状口縁である。口縁の下に断面形状が三角形のしっかりとした突帯が 1 条めぐる。外面は底面から底部のみへラミガキ胴部はナデである。内面は口縁下のみ目が広いハケメで胴部はナデで部分的にハケメが施されている。2 は甕棺の下甕である。脚台は内面の底が高く厚くなっている。鋤先状口縁は厚みがあり内側への出が大きい。口縁はやや楕円形で径は 30.0cm ~ 31.3cm である。内面のハケメは一部のみで外面のものに比べ目が粗い。色調・胎土・焼きは 1 の蓋と似ている。1・2 から K 01 の時期は弥生時代中期中葉から後葉である。

SD01・SK17・SK39 (Ⅱ区)・SK35・P08 (第 29 図 図版 4 の 7・8 遺物 第 30 図)

第 29 図はⅡ区の個別の遺構を集めたものである。SD01 はⅡ区の南東部にあり、



第29図 SD01 SK17・39(Ⅱ区)・35 P08実測図



第30図 SK17 遺物実測図

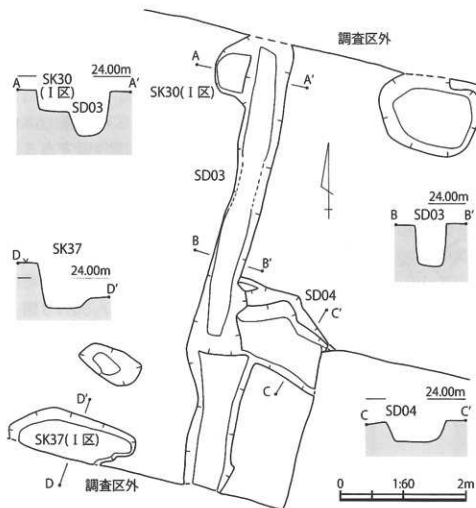
SK02とSX01に切られている溝状遺構である。SX01の内側までは続いていない。東は攪乱を受け長さは7.6m以上ある。幅は0.8mで深さは0.3mある。全体的に四角い掘り形をしている。

SK17はⅡ区の北東部、SK16の東にある土坑である。1.2～1.3mの丸みをもった方形をしており、底面は平坦であるが、南西側は小穴状に若干下がり深さは0.3mある。第30図の遺物が出土している。1～3は甕で1は比較的小さな鋤先状口縁をしている。内側への出は大きい。2は脚台で内面底はゆるくとがる。外面のハケメの目は細かい。3は広い平底の底部である。4は器台である。外面のハケメの目は細かい。

当調査区で出土したほかの器台に比べ太く、器壁が薄い。これらの遺物からSK17の時期は弥生時代中期中葉から後葉である。

SK35はⅡ区の北辺東側、SB04の北東にある土坑である。北側は調査区の外へ続くが、底面は出ているものと思われる。短辺0.7m・長辺1.0m×長さ1.7m、深さ0.2mの丸みがある台形状をしている。

SK39(Ⅱ区)は土坑でⅡ区の南部中央、SB02の東にある。SB02を切っている。長軸3.0



第31図 SD03・04 SK30(Ⅰ区)・37(Ⅰ区)実測図

SD03・SD04・SK30(Ⅰ区)・SK37(Ⅰ区) (第31図 図版5の4)

第31図はⅠ区の東端部分で東は宮ノ前遺跡の調査区に接している。

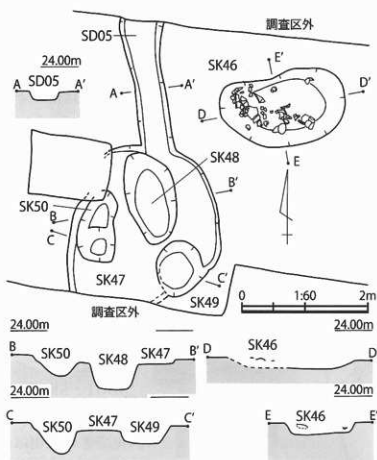
SD03は幅が0.5mで深さ0.6～0.7mの断面形状が四角形を呈する南北方向の溝状遺構である。SD04・SK50との切りあい関係は不明である。実測図や写真では、調査区南端から2.2m付近より深くなっており、また東へ0.3m程度のずれが見て取れる。この部分から別の遺構あるいはSD04となる可能性や掘削の時期は異なるが同時に併存し機能していた可能性が考えられる。SD04は幅が0.9～1.2m、深さ0.3m前後の東西方向の溝状遺構である。断面形状は四角形から台形状をしており、底は丸みをもつ部分がある。SD03でふれたとおりL字状に曲がっていた可能性がある。東側は調査区の外へ伸びるため長さは不明であるが、宮ノ前遺跡調査区ではその延長部分は見つかっておらず東へは2m以上続かない。

SK30(Ⅰ区)はSD03の北端西側にあり、切りあい関係は不明である。SD03の東へは続かないことから、径0.8mくらいの楕円形～小判形が想定される。SK37(Ⅰ区)はSD03の西側にあり、南は調査区の外に続く。長軸2.0m×短軸0.8m以上、深さは0.15mの楕円形状が想定される。

SD03・SD04・SK30(Ⅰ区)・SK37(Ⅰ区)は図化できる遺物はなく時期は不明である。

m×短軸1.3m、深さ0.1～0.2mの不整な楕円形をしている。底は南が下がる平坦な形状である。P08は土坑でⅡ区の中央、SX01の北東にある。SX01に切られている。長軸2.7m以上×短軸0.7mの不整な楕円形状をしている。検出上浅く平坦な土坑である。

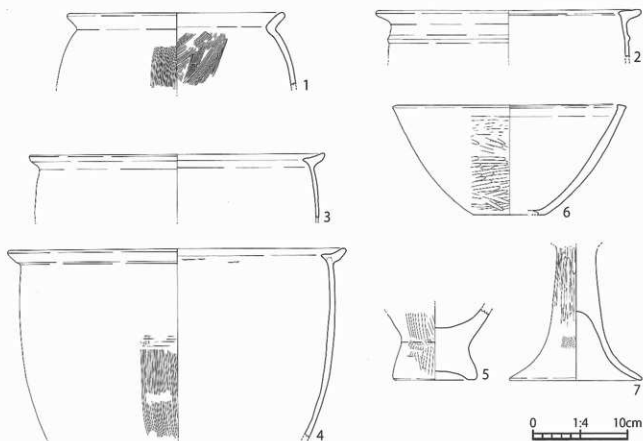
SD01・SK39(Ⅱ区)・SK35・P08図化できる遺物は出土しておらず遺構の時期は不明である。



第32図 SD05 SK46・47・48・49・50 実測図

SD05・SK46・SK47・
SK48・SK49・SK50
(第32図 図版5の5・6 遺物 第33図)

第32図はI区の中央、SB36とSB37の間の部分図である。SD05は幅0.5m前後、深さ0.15mの断面が台形状をした溝状遺構である。北側は調査区の外へ続く。SK47との切りあい関係は不明でありSK47と同一遺構の可能性も考えられようか。第33図1の壺の口縁部が出土している。砂礫が多い胎土で、目が細かいハケメが胴内外面に施されている。弥生時代後期の遺物である。遺物点数が少なく、SD05の時期は不明としておきたい。



第33図 SD05 SK46 遺物実測図

SK46はSD05の東にある土坑である。長軸2.0 m × 短軸1.2 mのやや不整な小判形をしている。底面は全体的に丸みをもっている。遺物の出土状況から廃棄土坑であろうか。

第33図2～7の遺物が出土している。2は口縁下に1条の突帯がめぐる甕である。3・4は甕である。鋤先状口縁の内面への出は大きく端部はとがる。外面側を上方に向ける。3の器壁は薄く、4の鋤先状口縁の継ぎ目は比較的明瞭である。胴上部の外面調整は摩擦のため不明であるが、口縁下の横方向のハケメが施される幅が広い。5は甕の底部である。楕円形をしており脚部分も整形はよくない。上げ底であるが厚くどっしりしている。6は鉢である。口縁端部は四角く収められ外面は密にヘラミガキが施されている。7は高坏の脚部で全体的に赤みがある焼きである。脚部下部にはヘラミガキが及ばずハケメとナデがのこる。これらの遺物からSK46の時期は弥生時代中期中葉から後葉と考えられる。

SK47は径2.4 mの円形から楕円形の土坑である。南側は調査区の外へ続く。検出面から深さ0.06～0.15 mと浅い。遺構内にSK48・SK49・SK50があるが、切りあい関係は不明である。

SK48はSK47の中にある土坑である。長軸1.4 m × 短軸0.8 mの楕円形をしている。深さは検出面から0.5 mあり、底は平坦で断面は台形状をしている。

SK49はSK47の中の南東際にある土坑である。径0.8 m前後、深さは検出面から0.25 mで全体的に丸い形状をしている。

SK50はSK47の中の西際にあり、長軸1.1 m × 短軸0.6 mの楕円形をしている土坑である。北側は深さが検出面から0.3 mあり、南へ向けてゆるく下がる。南側が段をもち低くなり深さ0.5 mある。底はとがり気味である。

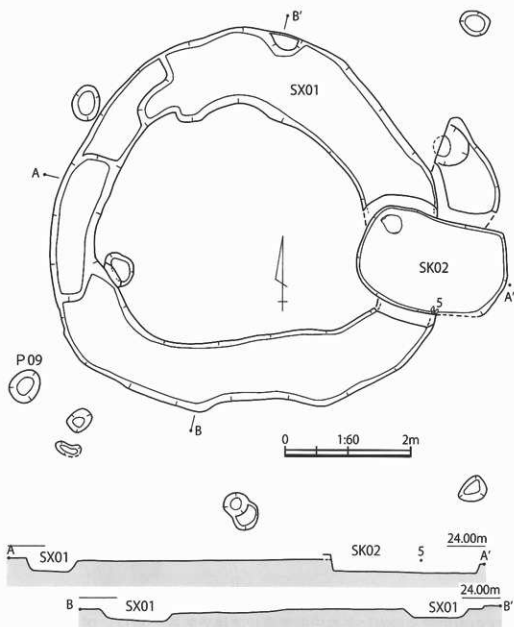
SK47・SK48・SK49・SK50は図化できる遺物はなく、遺構の時期は不明である。

SX01・SK02・P09 (第34図 図版5の7 遺物 第36図1・5)

SX01はⅡ区の中央部やや南にある円形周溝状遺構である。SK02に切られ、SD01を切っている。径は溝の中心から測って4.8～5.4 mでやや不整な円形をしている。溝の幅は1.0～1.2 m程度で、西側が狭く0.8 mである。検出面からの深さは全体的には0.25 mで、高いところは0.15 m、西側の低いところで0.3 mである。底は平坦で断面形状は台形状をしているところが多い。第36図1は甕の口縁部片で、鋤先状口縁の内面への出は厚く丸みがある。弥生時代中期中葉から後葉の遺物であるが点数が少なくSX01の時期は不明である。

SK02はSX01の東にある土坑で、SX01・SD01を切っている。長辺2.4 m × 短辺1.5 mの丸みをもった四角形をしている。まっすぐに掘り込まれており、深さは検出面から0.25 m程度で底は平坦である。第36図5は壺の底部である。はっきりとした低い底部があり、胎土に粗い砂礫が目立つ。弥生時代中期前半の遺物と思われるが遺物の点数が少なくSK02の時期は不明としておきたい。

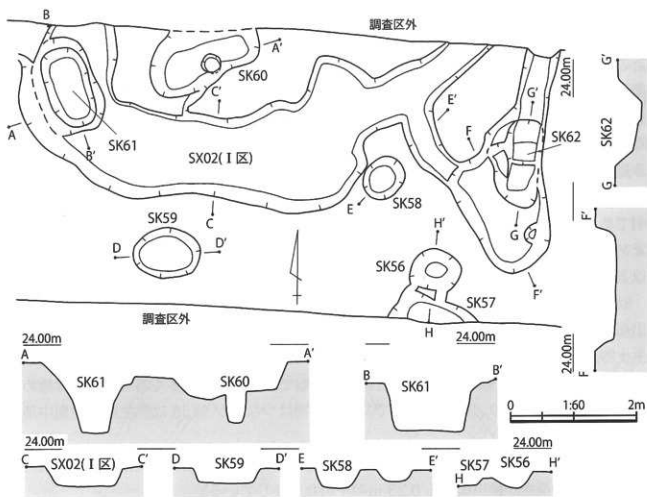
P09はSX01の南東にある径0.4 m前後の円形の小穴である。図化できる遺物はなく、遺構の時期は不明である。



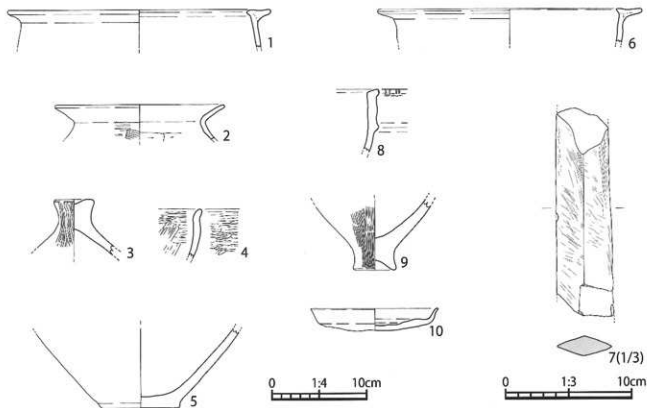
第34図 SX01 SK02 P09実測図

SX02 (I区)・SK56・SK57・SK58・SK59・SK60・SK61・SK62 (第35図 図版5の8・図版6の1 遺物 第36図2・3・6・9)

第35図はI区の西部のSX02(I区)の周辺の部分図である。SX02(I区)は円形周溝状遺構が推定される遺構である。円形周溝であるとなれば全体の約3分の1が見つかったことになる。遺構や低まりが遺構の内外にかかっているため全体的な形状が想定しづらいが、溝の中心から測って径5.0～7.0m程度の楕円形となろうか。溝の幅は0.6～1.8mと場所によって異なり膨れているところが見られる。深さは0.25～0.3mで断面は台形状をしている。SK61との切りあい関係は不明だがSK61深さが全く異なるため掘削の順序からSK61を切っていると考えておきたい。東側は断面E-E'の北東にかかる短い溝状の深さが変わらない落込みが取り付け、図面上ではSX02(I区)の北東部がこの落込みにつながるようにも見える。また、SK62にも同様の溝状の落込みがかかっており、



第35図 SX02(I区) SK56・57・58・59・60・61・62実測図



第36図 SX01・02(I区)・03(II区) SK02・58・60・63 P 10遺物実測図

SX02(Ⅰ区)が円形周溝であるかは推定にとどめておきたい。第36図2・3が出土している。2は古式土師器の甕の口縁部の小破片で、器壁が薄い。内面は屈曲部から下がったところよりヘラケズリを施している。外面はハケメとしているが摩耗のため残存が悪く外面調整はタタキの可能性もあるかもしれない。3は弥生土器の蓋である。つまみのとなる部分から直線的に伸びるため蓋とした。器面の残りはよく、赤く焼かれた土器と思われる。胎土は精製されている可能性がある。SX02(Ⅰ区)の時期は遺物点数が少なく切りあう遺構の遺物もまじると考えられることから不明としておく。

SK56・SK57は土坑でSX02(Ⅰ区)の南側にある。SK56とSK57の切り合い関係は不明である。SK56は径0.7～0.8mの円形をしている。深さは検出面から0.25mの丸い底である。SK57は南部が調査区の外へ続くため形状は不明である。掘削した範囲は1.3m以上×0.4m以上の大きさである。深さは0.25mで平坦な底である。

SK58は土坑でSX02(Ⅰ区)の南側にある。SK58は径0.6～0.7mの円形で深さが検出面から0.3mの丸みがある底をしている。第36図6・7遺物が出土している。6の弥生土器の甕の口縁部片が出土している。鋤先状口縁が外側へ長く伸びる形状である。7は石製の剣である。緑みがある灰色の石材で、肉眼でわかる擦痕も多くあるが表面は極めて滑らかに研がれており、刃部は鋭利である。遺物は少ないがSK58は弥生時代中期中葉から後葉の遺構と考えたい。

SK59は土坑でSX02(Ⅰ区)の南側にある。SK59は長軸1.0m×短軸0.8mの楕円形をしており、深さが検出面から0.23mの平坦な底をしている。

SK60は土坑でSX02(Ⅰ区)の内側にある。長軸1.8m×短軸1.0mの丸みが強い長方形または小判形をしている。北隅は調査区外へ続くが、底は出ている。深さは検出面から0.4～0.55mで南側が深くっており、全体的に丸みがある底をしている。第36図9の小さな脚台がつく甕が出土している。外面調整のハケメの目は細かい。中央に径0.3m、深さが0.9mの深い小穴があるがSK60にともなうものかどうかはわからない。遺物が少なくSK60の時期は不明である。SK60の西半辺りからSX02(Ⅰ区)まで深さが0.2mの落ち込みがあり遺構となる可能性があるかもしれない。

SK61は土坑でSX02(Ⅰ区)の東部の溝に重なった位置にある。長辺1.6m×短辺1.0mの丸みがある長方形で、深さが検出面から1.1mの平坦な底をしている。形状から土墳墓など想定されるがそれを裏付けるような遺物は出土していない。

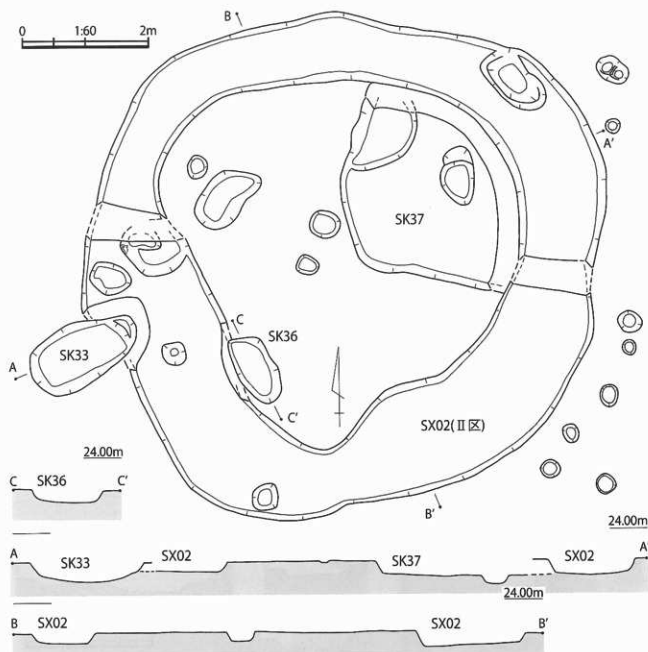
SK62は土坑でSX02(Ⅰ区)の東側にある。SK62は遺構番号が重複しており、SX02(Ⅰ区)の西側にも同じ遺構番号の遺構がある(第38図)。上部が長軸1.4m×短軸0.8mのやや不整な小判形をしている。下部は長方形となり、長辺側面はまっすぐに掘られ、短辺側は中央がくぼみ形状である。深さは検出面から0.7mである。SK62の南側に断面図F-F'の土坑状の落ち込みがあり、北側には溝状の落ち込みが接する。SK62の下部の長方形の部分は北側の溝状の落ち込みと図上連続しているようにも見て取れ、溝状の落ち込みの一部の可能性も考えられる。

SK59・SK61・SK62は図化できる遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

SX02(Ⅱ区)・SK33・SK36・SK37(Ⅱ区) (第37図 図版6の2～4)

SX02(Ⅱ区)は円形周溝状遺構でⅡ区の北東部にある。SK37を切り、SK33とSK36に切られている。径は溝の中心から6.6～7.0mで、北東―南西方向が広くなりまた溝の幅が変化するためいびつにもみえるが概して円い形状をしている。溝の幅は0.9～1.7mあり、検出面からの深さは0.1～0.3mで南西部分が高く北西部分が深い。底は平坦なところが多く、断面形状は台形状になる。切りあいのある遺構のほか内外に小穴や土坑状の落ち込みがあるが、SX02(Ⅱ区)の周囲の東や南は特に小穴が多く分布しており、SX02(Ⅱ区)にともなう可能性は低いと考えられる。当調査区で見つかった円形周溝状遺構の中で最も大きい。

SK33はSX02(Ⅱ区)の西にある土坑で、SX02(Ⅱ区)を切っている。長軸1.8m×短軸1.0mの小判形をしている。深さは検出面から0.25mでゆるく丸い形状をしている。



第37図 SX02(Ⅱ区) SK33・36・37(Ⅱ区)実測図

SK36 は土坑で SX02(Ⅱ区) の南西内側にあり、SX02(Ⅱ区) を切っている。長軸 1.1 m × 短軸 0.6 m の楕円形をしている。深さは検出面から 0.2 m で丸い形状をしている。

SK37(Ⅱ区) は SX02(Ⅱ区) の北東内側にあり、SX02(Ⅱ区) に切られている土坑である。東西方向に 3.1 m × 南北方向に 3.0 m の隅が丸く 90° に開いた扇状に残っている。深さは検出面から 0.15 m で底はやや微起伏がある。東辺に 1.2 m 以上 × 0.9 m、深さが検出面から 0.4 m の半月状の土坑が辺に沿っている。SK37 にともなうものと考えられる。辺に沿って深い土坑があるため竪穴建物になる可能性も考えておきたい。

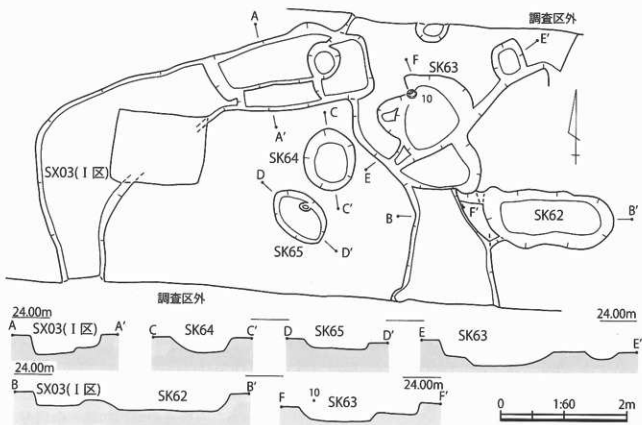
SX02(Ⅱ区)・SK33・SK36・SK37(Ⅱ区) は図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。

SX03(Ⅰ区)・SK62・SK63・SK64・SK65

(第 38 図 図版 6 の 5～8 遺物 第 36 図 10)

SX03(Ⅰ区) はⅠ区の西端、SX02(Ⅰ区) の西にある円形周溝状遺構である。遺構の時期から北東にある SK63 に切られている。径は溝の中心から推定を含め 5.5 m 程度で、溝の幅は 0.7～1.7 m あり、平面形状も場所によって変化が大きい。深さは概して 0.15 m で北側の深いところで 0.25 m ある。また北東部は深さが変わらない落ち込みがあるため形状が分りづらくなっている。図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。

SK62 は SX03(Ⅰ区) の東にあり、SX03(Ⅰ区) と接している土坑である。遺構番号が SX02(Ⅰ区) の東にある土坑と重複している。長軸 2.1 m × 短軸 0.8 m の長い小判形を



第 38 図 SX03(Ⅰ区) SK62・63・64・65 実測図

しており、深さは検出面から 0.3 m で底はゆるく丸みがある形状である。図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。

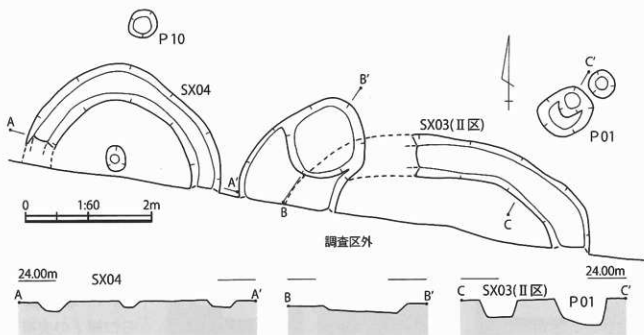
SK63 は SX03(Ⅰ区)の北東にある土坑で、遺構の時期から SX03(Ⅰ区)を切っている。広いところで 2.1 m、狭いところで 0.8 m の不整形な形をしている。検出面からの深さは南部の高いところで 0.3 m 北部の低いところで 0.4 m ある。底はやや丸みがある形状である。第 36 図 10 の須恵器の皿が出土している。底は摩耗しているがヘラキリと思われる。内面の底面は凹凸が著しい。SK63 の北側には落ち込みがあり、10 は SK63 の上から出土しているため確実にこの遺物が SK63 にともなうかは疑問の余地があるが、10 は完形に近く残っており SK63 は 10 から古代の遺構と考えておく。

SK64 と SK65 は SX03(Ⅰ区)の内側にある土坑である。SK64 は長軸 1.0 m × 短軸 0.8 m の南北に長い円形をしており、深さは検出面から 0.15 m で底は丸い形状である。SK65 は長軸 1.0 m × 短軸 0.7 m の楕円形をしており、深さは検出面から 0.15 m で断面形状は底が平坦な椀状である。ともに図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。

SX03(Ⅱ区)・SX04・P01・P10

(第 39 図 図版 7 の 1・2 遺物 第 36 図 4)

SX03(Ⅱ区)は円形周溝状遺構でⅡ区の南辺中央、SX04 の東にある。南側は調査区外に続く。西側は断面 B-B' の落ち込みに切られている。溝の中心からの径が分かるくらいに掘削できていないが、推定で 4.3 m 程度になりそうである。溝の幅は 0.6 ~ 0.8 m あり、検出面が高い東側からの深さは 0.3 ~ 0.5 m で中央が低くなっている。断面形状は台形状である。第 34 図 4 の鉢の小片が出土している。口縁部は外側にくの字に短く折れ、面をもち端部は傾斜が強い。口径 18cm 前後になると思われる。器面は全面密にヘラミガキされ平滑である。種類が特定できず、また遺構の時期は不明である。



第 39 図 SX03(Ⅱ区)・04 P01・10 実測図

SX04 は SX03(Ⅱ区)の西にある円形周溝状遺構である。南側は調査区外に続く。溝の中心からの径が 2.7 m の円形をしている。溝の幅は 0.4 ~ 0.6 m あり、検出面からの深さは 0.15 m で、断面形状は台形状となっている。図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。

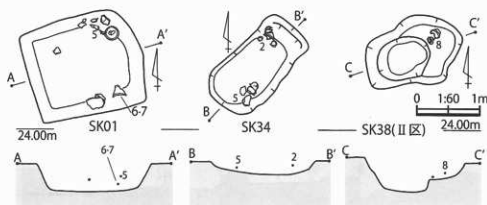
P 01 は SX03(Ⅱ区)の北東にある小穴である。径が 0.5 m ~ 0.8 m の横長な円形をしており、底は傾斜があり北東に低くなる。深さは検出面から 0.4 m である。第 36 図 8 の甕が出土している。口縁下の突帯の下はやや丸みがあり鉢となる可能性も考えられる。口縁端部に接して低い突帯と口縁下に 2 条めぐらす。口縁端部のキザミは線状で浅い。突帯で挟まれた範囲は器壁が厚い。弥生時代前期末から中期初頭の遺物である。遺物の出土が少なく遺構の時期は不明である。P 10 は SX04 の北にある小穴である。径 0.45 m の円形をしている。深さは不明である。図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。

SK01・SK34・SK38(Ⅱ区) (第40図 図版7の3~5 遺物 第41・42図)

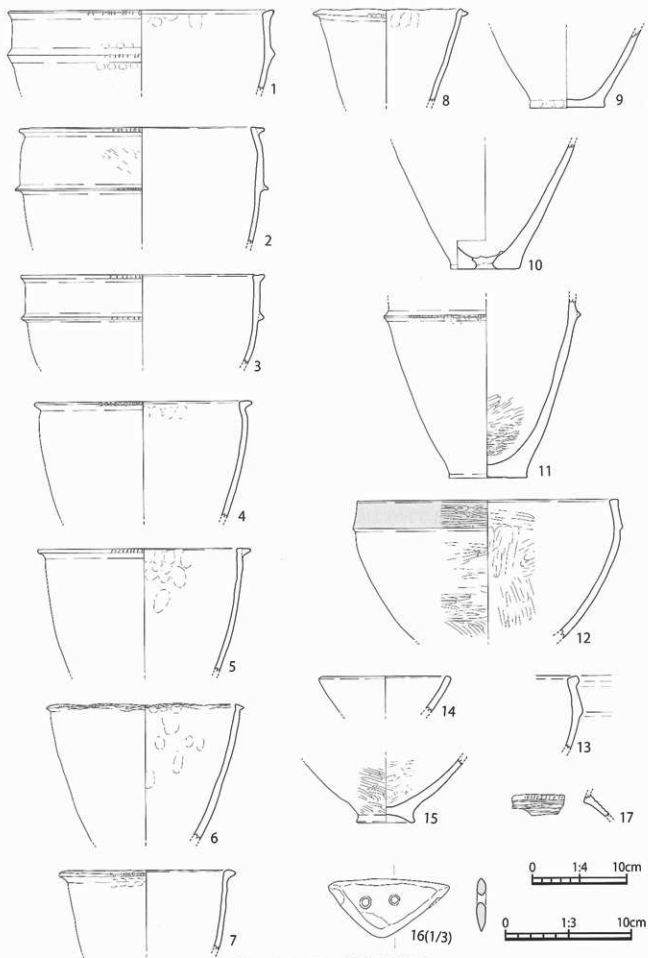
第 40 図はⅡ区の個別遺構を集めたものである。SK01 は土坑でⅡ区の東半中央、SD01 の北にある。形状は 0.8 ~ 0.9 m の方形であり、深さは検出面から 0.4 m で底はわずかにたわみ、断面形状は台形をしている。第 41 図の多くの遺物が出土しており廃棄土坑と考えられるが、方形にしっかり掘られた土坑の形状から単に必要ななくなったものを捨てた土坑とは考えがたい。

第 41 図 1 ~ 3 は口縁端部に接する突帯と口縁下の突帯が 2 条めぐる甕である。突帯より上部は概ねまっすぐになる器形である。1 は口縁端部の突帯が上向きにとりつく。他に比べ色調が明るい。2 は突帯上のキザミが細身で小さい。4 ~ 8 は口縁端部に接する突帯が 1 条めぐる甕である。口縁端部の突帯から直線的にすばまる器形である。5 の突帯のキザミは上が右にやや傾き深さがやや浅い。6 は断面三角形の小さな突帯である。突帯端部の残りが悪くまた不整形でキザミが小さく明瞭ではない部分が多い。全体的に整形はよくない。7 はやや厚めの突帯で口縁がやや楕円形で口径 18.2 ~ 19.0 cm である。8 は整形が悪くいびつである。突帯の残りが悪いが分かるところでは施されるキザミは大きく隣と接する。9 ~ 11 は甕の底部である。平らで少し突き出た底から直線的に立ち上がり胴部へとなる。10 は底に焼成後の穿孔がある。孔は 1.8 ~ 2.4 cm の楕円形で、形状から内外

面から穿たれたと考えられる。外面側の孔の周囲は丁寧に仕上げられている。外面の底はヘラミガキである。11 は底部から口縁下の突帯まで残っている。突



第 40 図 SK01・34・38(Ⅱ区) 実測図

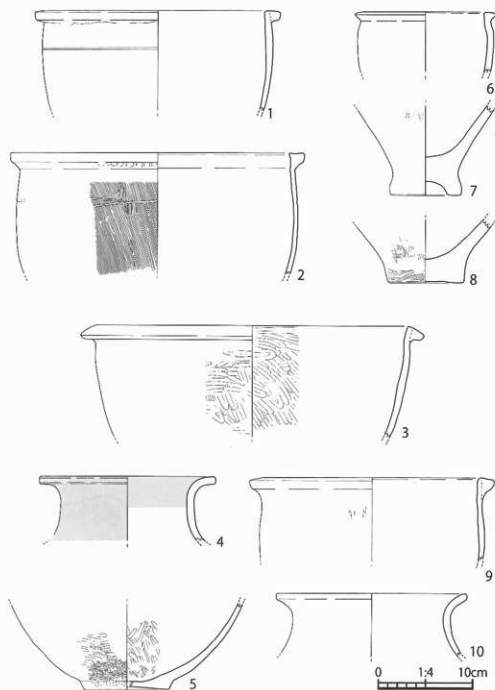


第41図 SK01 遺物実測図

帯のキザミは切るように刻まれ細い。キザミの向きは上が左に大きく傾くところとほぼまっすぐの部分にところにはっきり分かれる。内面の底から高さ約 8.2cm まで密にヘラミガキされている。12・13 は口縁に高い段をもつ鉢である。12 は段の幅高さがやや均一ではない。段から口縁部外側にのみ丹塗され、暗い橙色に発色している。13 は口縁端部に四角く肥厚し突帯状になっている。口径は 29～34cm 程度と思われる。調整は摩耗により分からないが平滑な器面のところがありヘラミガキの可能性が高い。14 は鉢の口縁部でひずみがある。胎土やはっきりとしたヨコナデが施されていることからほかの SK01 の遺物とは異なる時期のものと思われる。15 は壺の底部である。底外面は半球状に丸くくぼみ高い。他に比べ胎土に砂礫が少ない。16 は片岩製の三角形をした石庖丁である。

器表は風化や荒れが見られるものの刃部は鋭利のままである。背も刃部ほどではないが鋭くごくわずかに平坦に研がれている。17 は縄文土器の鉢である。頸部との付け根に縦方向に短い沈線を櫛歯状にいれ、その下に 4 本の沈線がのこる。これらの遺物から SK01 の時期は弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

SK34 は土坑でⅡ区の北東部、SX02(Ⅱ区)とSB04の間にある。長辺 1.7 m × 短辺 0.9 m のやや隅が丸い長方形をしている。深さは検出面から 0.2 m で底は若干丸みがあ



第 42 図 SK34・38(Ⅱ区)遺物実測図

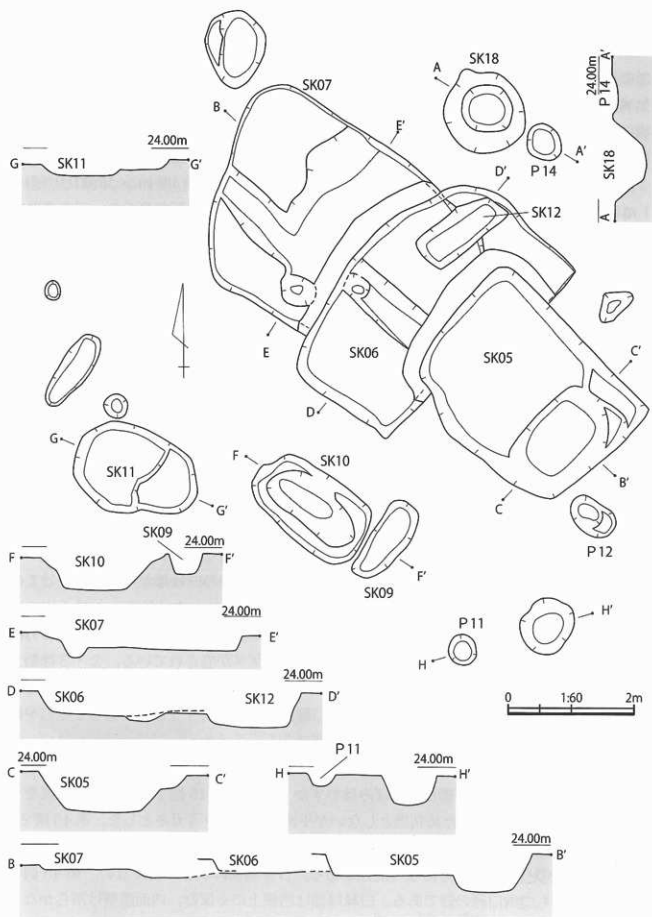
る。第42図の1～5の遺物が出土している。1・2は甕である。断面が台形状の厚い突帯を口縁端部に接して貼り付け、口縁下に沈線が1条めぐる。1は突帯の貼り付けあとが明瞭で、2は貼り付けた時のユビオサエが明瞭に残る。口縁下の沈線は2本になっているところがある。3は鉢である。外面はハケメのあとヘラミガキされヘラミガキの隙間にハケメがのこる。4は壺である。口縁が強く外反しほぼ水平となる。端部はややくぼみ凹線状になっている。5は壺の底部である。低く突き出るような底から丸く立ち上がる。これらの遺物からSK34の時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

SK38は土坑でⅡ区の中央部の北東よりSB04の南にある。長軸1.3m×短軸0.9～1.1mのいびつな楕円形をしている。底は2段に落ち、深さは検出面から0.5mで、底は丸みがある。第42図の6～10の遺物が出土している。6・9は甕の口縁部である。6は断面三角形の突帯を、9は断面丸みがある三角形から台形状の大きな突帯を口縁端部に接して貼り付けている。胎土に5mmをこえる礫が目立つ。7・8は甕の底部である。7はどっしりとした短い脚台をしており、内面底部にススが付着している。外面調整の残りが悪いがハケメである。8は底面と底から1.3cmのみにヘラミガキを施されている。10は壺の口縁で、2～4mmの礫が胎土に非常に多くはいる。これらの遺物から、SK38の時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

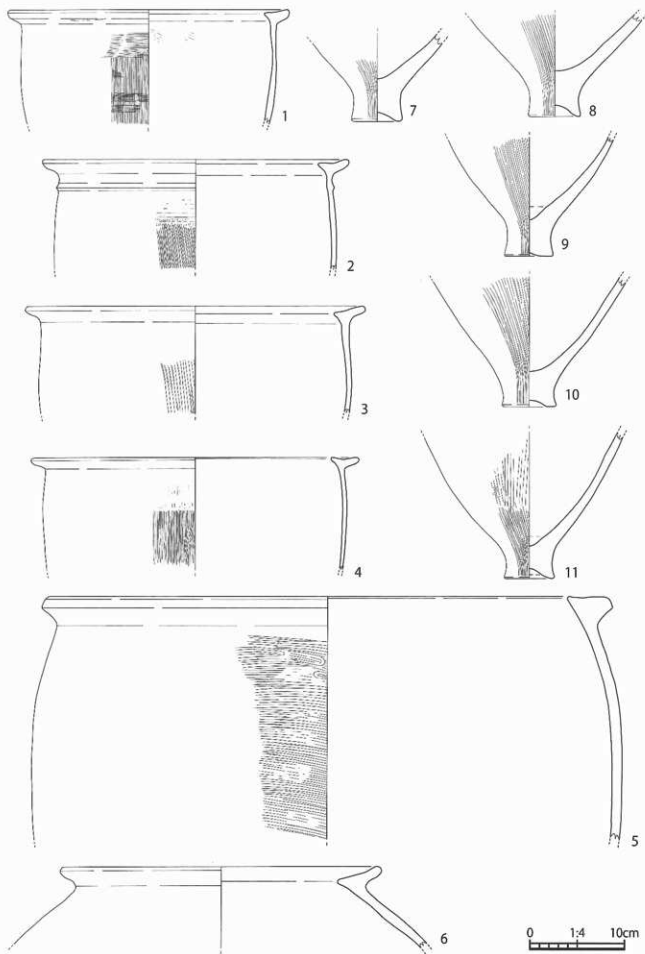
SK05・SK06・SK07・SK09・SK10・SK11・SK12・SK18・P11・P12・P14（第43図 図版7の6～8 遺物 第44～46図）

第43図はⅡ区の南西部の部分図である。SK05は土坑でSB03の北西にある。SK06を切っている。長辺3.3m×短辺2.4mの長方形をしており、深さは北西の高いところで0.3m南東の低いところで0.6mである。平坦な底面からやや丸くまっすぐに立ち上がる。

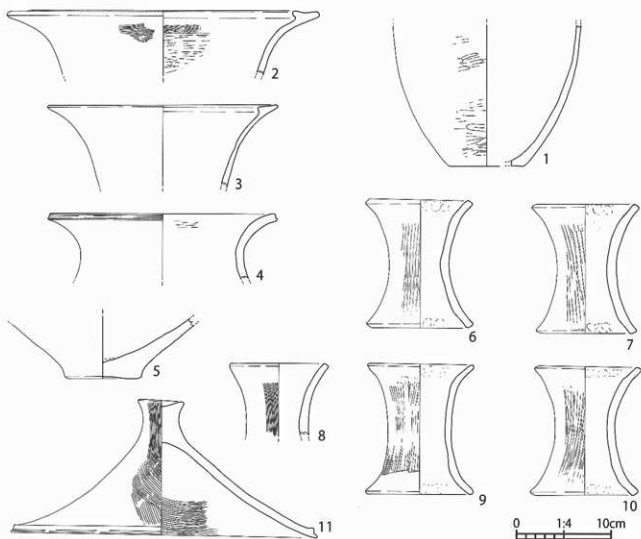
第44・45図の遺物が出土している。第44図1～6は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。1～4は鋤先状口縁の内面への出が大きく、2～4は外面へも長く出ている。口縁下は広く横方向のハケメ（1・2）、ナデ（3・4）が施されている。1の外面のハケメの目は非常に細かく、内面上部に部分的にハケメが施されている。2・3は胎土に赤褐色粒が目立つ。4はやや歪みがある。5は大型で口縁内法は51cmある。口縁部は台形状に拡張され整形は角をもっている。口縁部は丹塗のような色調であるが垂れやほみ出しが認められない。外面のヘラミガキは密である。6は胎土に石英の礫が目立つ。第44図7～11は甕の底部である。比較的直立し細い脚台である。9・11の内面の底は段を持ち突出しくぼむ。9の脚台のくぼみはわずかである。第45図1は平たく広い底をもつ甕で、外面調整は摩耗のため判然としないが平滑さからヘラミガキとした。第45図2・3は内面が拡張され鋤先状口縁となる広口壺の口縁から頸部片である。2は赤い焼きをしており、外面のハケメは部分的な可能性がある。3は器面の状態が良くない。第45図4は短い頸部をもつ素口縁の壺である。口縁端部は凹線上にくぼむ。内面調整は滑らかなためヘラミガキとしたが残りも悪くヘラミガキ痕はわからない。土器の色調は褐色みが強く他と異なる。色調と砂礫の含みかた、剥離の状況が第45図5と似ており同一個体の可能



第 43 图 SK05 · 06 · 07 · 09 · 10 · 11 · 12 · 18 P 11 · 12 · 14 实测图



第 44 図 SK05 遺物実測図

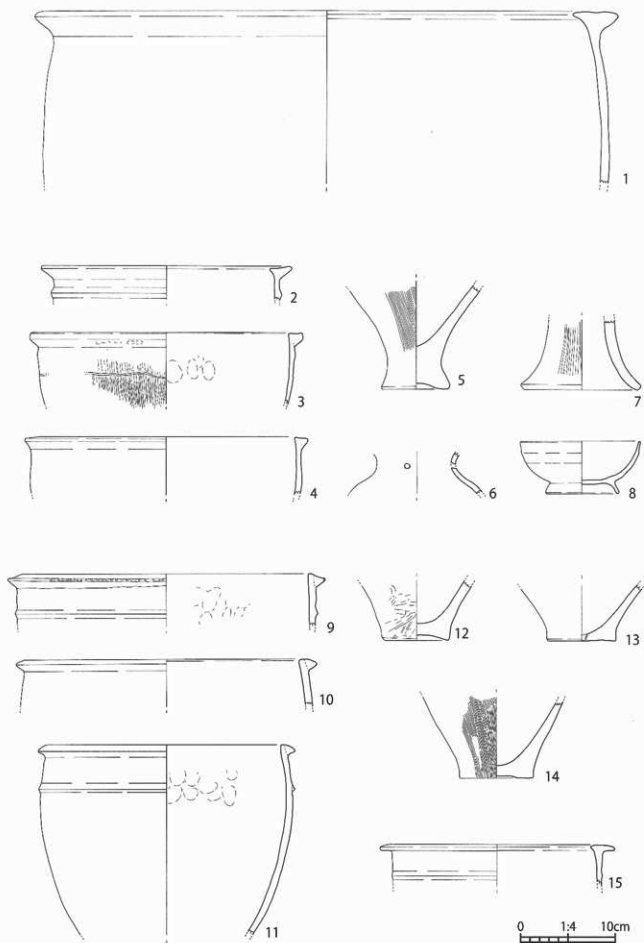


第 45 図 SK05 遺物実測図

性がある。第 45 図 5 は壺の底部である。胎土に砂礫を比較的多く含む。第 45 図 6～10 は器台である。6・7・10 は外面のハケメの目が粗く、ヨコナデが弱く内面にユビオサエが連続的にのこる。8 の外面ハケメの目は細かい。9 はやや胴が太く他に比べ器壁が薄い。第 45 図 11 は蓋である。つまみ部分のハケメは細かい。口縁端部ははっきりとした段がつく。第 45 図 2～4 や第 45 図 3 から SK05 の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

SK06 は土坑である。SK05 に切れ、SK07 を切っている。SK12 との切り合いは不明であるが、掘削の順序から切っていると考えておきたい。長辺 4.2 m × 短辺 2.5 m の不整で丸みがある長方形から台形をしている。深さは検出面から東隅が浅く 0.03 m で西隅へ向けて深くなり深さが 0.35 m となる。平坦な底面からやや丸くまっすぐに立ち上がる。第 46 図 1 の遺物が出土している。大きな甕の口縁で鋤先状口縁は内側への出が大きく断面形状はくばし状で、外側は三角形状をしている。弥生時代中期後半の遺物と考えられるが、点数が少なく遺構の時期は SK05 より古いとしておきたい。

SK07 は土坑である。SK06 に切られている。SK06 内の底面の低まりは、つながりから SK07 であると考えられ、長辺は推定で 4.2 m × 幅が 3.2 m の丸みがある平行四辺形か台形の形状をしている。底面の起伏は大きく、北西－南東方向に溝状のくぼみがある。北隅



第46図 SK06・07・09 P 14 遺物実測図

がやや高いが、南東へ向けて緩やかに低くなる。深さは検出面から 0.05 ～ 0.25cm である。形状から竪穴建物の可能性も考えておきたい。

第 46 図 2 ～ 8 の遺物が出土している。2 ～ 4 は甕の口縁である。2 は小さな鋤先状口縁をしており、口縁下の近いところに断面三角形の突帯が 1 条めぐる。3 は台形状の突帯が口縁端部に接して、振れ幅が大きい沈線が口縁下にめぐる。4 は口縁端部に接する突帯の形状が断面三角形である。5 は甕の底部である。脚台は比較的大きく、内面底部はとがる。底面のくぼみは浅い。6 は壺の頸部で、頸部に焼成前穿孔がある。小破片のため分かるのは 1 か所のみである。7 は器台で、下に向けて図化したが天地は不明である。8 は土師器の高台がついた坏で、胎土が精良である。8 は 3 分の 2 程度の残存で単に混入したとは考えられず別の遺構が重っていた可能性がある。SK05 より下位の遺構であるため SK07 にともなう遺物ではない。2 ～ 4 も時期差が考えられる遺物であるが、SK07 は弥生時代中期中葉から後葉と考えておきたい。

SK09 は土坑で SK05 の南西にある。長軸 1.4 m × 短軸 0.6 m の楕円形に近い形状をしている。深さは検出面から 0.3 m で底は若干丸みがあり、船底状をしている。第 46 図 9 ～ 15 の遺物が出土している。9 ～ 11 は甕である。口縁端部に接して断面三角形のやや大きい突帯を廻らしている。9 の突帯上のキザミは D 字形についているものが多い。口縁下の突帯はやや細く低い。全体的に歪みがある。10 は歪みが大きく反転復元しているが精度は低い。11 の口縁下の突帯は小さく、胴部は丸みがある。内面調整の工具によるナデはハケメに見えるところもある。12 ～ 13 は甕の底部である。12 は上げ底で、14 の外面のハケメは目が非常に細かく、底は粗く凹ませている。これらの遺物から SK09 の時期は弥生時代前期末から中期初頭と考えられる。

SK10 は土坑で SK06 の南西にある。長軸 2.0 m × 短軸 1.1 m の隅が丸い長方形をしている。検出面からの深さは 0.5 m で、段をもって低くなるやや丸い底をしている。

SK11 は土坑で SK06 の南西にある。長軸 2.0 m × 短軸 1.4 m の小判形をしている。検出面からの深さは 0.2 m で、段をもって北西側が低くなる。底面はやや凹凸がある。

SK12 は土坑で SK06 の北部にある。長辺 1.4 m × 短辺 0.6 m の長方形をしている。検出面からの深さは 0.5 m の平坦な底をしている。

SK18 は土坑で SK06 の北にある。径 1.3 m の円形をしておりすり鉢状に狭くなりながら丸い底となる。検出面からの深さは 0.55 m ある。

SK10・SK11・SK12・SK18 は図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。

P 11・P12 は小穴で SK05 の南にある。P 11 は径 0.45 m の円形をしており検出面からの深さは 0.2 m ある。P 12 は長軸 0.8 m × 短軸 0.5 m の小判形をしている。北東側が低く深さは 0.35 m ある。ともに図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。

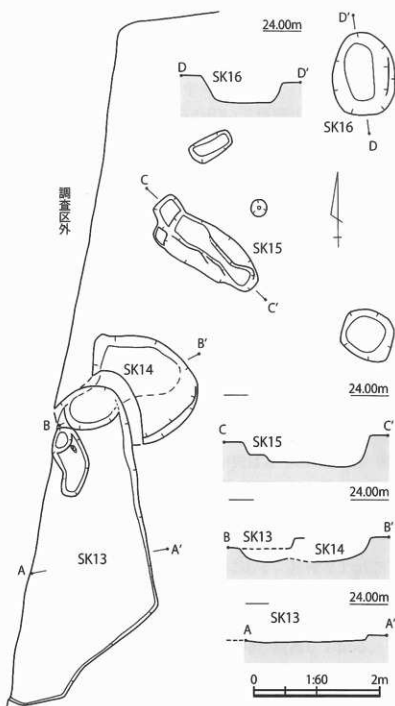
P 14 は SK06 の北東にある小穴である。径 0.5 ～ 0.6 m の円形をしている。深さは 0.1 m と浅い。第 46 図 15 の甕が出土している。精良な胎土で赤く焼かれている。鋤先状口縁はやや丸みをおびる。口縁下の断面三角形の突帯は低い。弥生時代中期中葉から後葉の遺物と考えられる。遺物が少なく遺構の時期は不明である。

SK13・SK14・SK15・SK16 (第47図 図版8の1 遺物48図)

第47図はⅡ区の西辺の部分図である。SK13は不定形で浅い落ち込み状の土坑である。SK14を切っている。長いところで5.2 mの大きさ、深さは0.1～0.15 mである。調査区外へ続く。

SK14は土坑である。SK13の北にあり、SK13に切られている。2.0 m前後の不整形な円形をしている。北西側に深くなり深さは検出面から0.3 mある。

SK15は土坑でⅡ区の北西隅でSK13の北にある。長軸2.0 m×短軸0.8 mのややいびつな楕円形をしている。検出面からの深さは0.4 mで段をもって細長く掘られたような形状である。

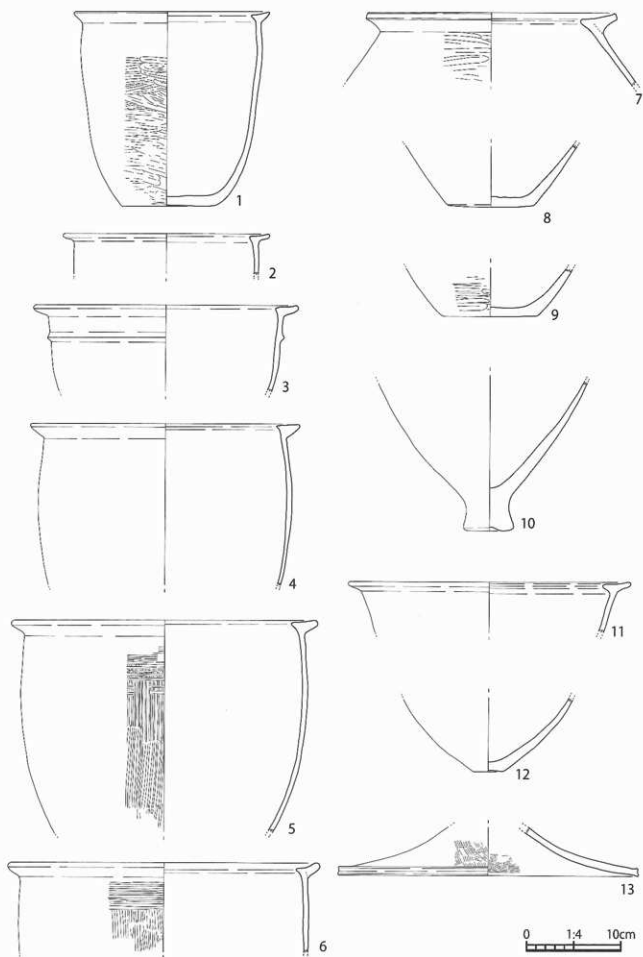


第47図 SK13・14・15・16 実測図

SK13・SK14・SK15は図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。

SK16はⅡ区の北西隅でSK15の北東にある。調査区の検出面なかで北西隅は最も低く標高23.2 m程度である。長軸1.4 m×短軸1.0 mの小判形をしている。検出面からの深さは0.3 mで全体的に丸い形状をしている。

第48図の遺物が出土している。1は広く平らな底をもつ甕である。底部から強く曲り直立した胴部となる。外面は底面から口縁下5 cm程度まで密にヘラミガキされている。鋤先状口縁は幅が狭い。2～6は甕である。2～4は鋤先状口縁の内側への出は小さい。2は外側の厚さが薄く、胎土に砂の混じりが少ない。3は口縁下に突帯が1条めぐる。4は鋤先状口縁外側の断面形状が三角形で厚みがある。調整は摩耗のため不明であるがナデの可能性が高い。4・5はともにゆるく膨れた胴部である。5の外面のハケメは目が



第 48 図 SK16 遺物実測図

太く間隔が広い。6は鋤先状口縁の外側が上方に向いている。7は口がすばまる甕の口縁部である。口縁端部は面をもちゆるい凹線状になっている。全体的に赤い焼き上がりである。8・9は平底の甕の底部である。10は甕の底部で、脚台の底の凹みは小さく柱実状である。11は鉢の口縁部で、鋤先状口縁は平らで内側への出が大きく厚みがある。胎土に砂の混じりが少ない。12は壺の底部である。13は蓋である。口縁端部は強くナデられ段状になっている。一括性がどの程度あるか検証できないが、鋤先状口縁の形状に差がある。時期差をとらえることも可能であるが、SK16が大きな規模の土坑ではなく土坑として長期にわたって機能したとも考えがたい。SK16の時期は弥生時代中期中葉から後葉としておきたい。

SK19・SK20・SK21・SK23・SK25・SK26

(第49図 図版8の2・3 遺物 第50図1・2・12)

第49図はⅡ区の西半中央付近の部分図である。SK19は土坑でSK06の北東にある。長軸2.4m×短軸1.6mの円い三角形で底はゆるくたわんでいる。検出面からの深さは0.2mである。第50図1が出土している。1は脚台である。通有の甕の脚台ではなく、壺や鉢が上部になると思われる。裾付近でやや外側に屈曲する。外面のハケメは非常に細かい。

SK20は土坑でSK21の西にある。径1.0～1.1mの円形をしており底中央はやや高く反っている。検出面からの深さは0.05mである。

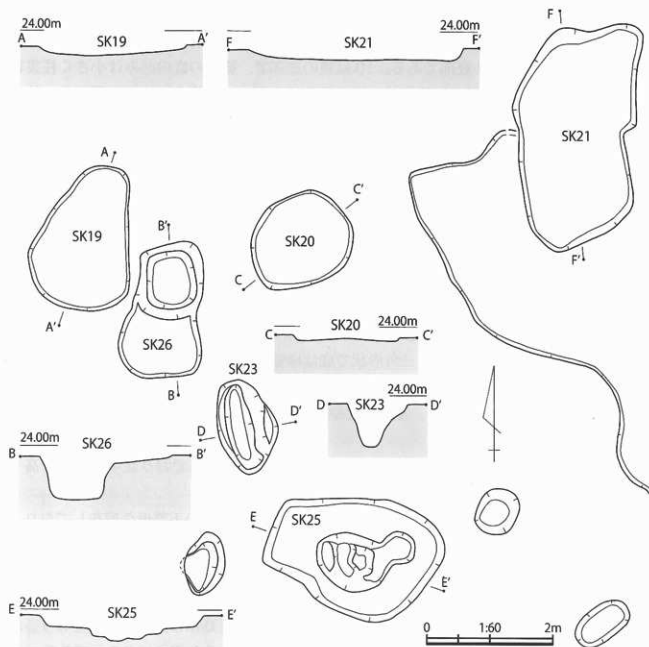
SK21は土坑でSK24の西にある。長軸2.3m×短軸1.1mの不整形な形をしており、底は起伏がある。検出面からの深さは0.2mである。第50図2の壺の口縁が出土している。袋状口縁の外面の屈曲部から下向きに拡張したような形状で、端部は面をもっている。古墳時代前期の遺物であるが破片の1点のみのため遺構の時期は決めがたい。

SK23は土坑でSK05の北東にある。長軸1.5m×短軸1.0mの楕円形をしており、段がつきながらすり鉢状にくぼむ。底は起伏がある。検出面からの深さは0.7mである。

SK25は土坑でSK05の東にある。長軸1.8m×短軸1.3mの円い台形状をしている。検出面から0.2m低くなり、中央はさらにくぼむ。図では細かい屈曲表現されているが、底は概して丸い形状である。検出面からの深さは0.4mである。第50図12の甕の小破片が出土している。鋤先状口縁は厚みがあり断面が台形状をしており内側への出はわずかなのである。

SK26は土坑でSK05の北東にある。長軸2.1m×短軸1.0～1.3mの丸みがある方形の掘り込みが重なったような形状をしている。南側は浅く検出面からの深さは0.1m、北側は屈折してまっすぐに掘られ0.4mの深さがある。南側は北側のステップの役割であろうか。第51図のSK26と遺構番号が重複している。

SK20・SK23・SK26は図化できる遺物の出土はなく、SK19・SK25は1点のみのため遺構の時期は不明である。

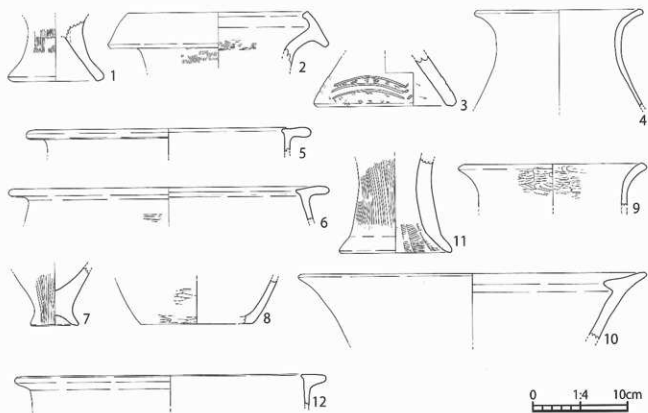


第49図 SK19・20・21・23・25・26実測図

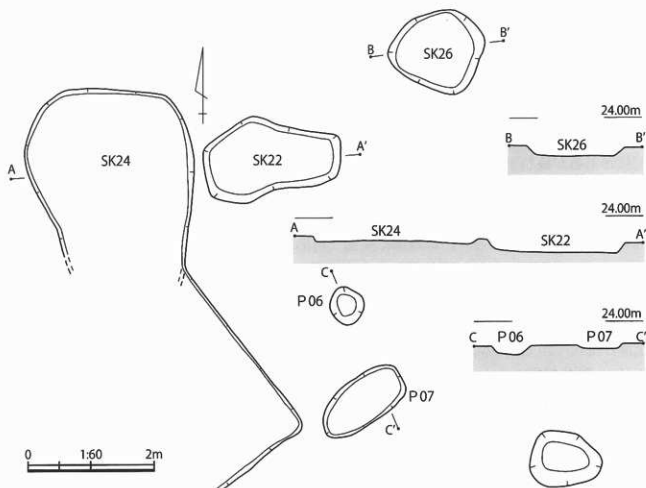
SK22・SK24・SK26・P06・07

(第51図 図版8の4 遺物 第50図3～10)

第51図はⅡ区の中央やや北寄りの部分図である。SK22は土坑でSK21の東にある。長軸2.2m×短軸0.8～1.4mのいびつな楕円形から長方形をしている。底は起伏があるが概ね平坦である。検出面からの深さは0.15mである。第50図3・4の遺物が出土している。3は縄文土器の脚台である。脚台の裾付近に弧状に3本の明瞭な沈線をめぐらす。残りから5弧になると思われる。3本の沈線で囲まれた下側は擬縄文が磨り消されている。内面のケズリはきれいな仕上がりとなっている。胎土に白色の砂礫・雲母が目立つ。4は壺の口縁から胴部にかけての破片である。頸部へむけて直線的にすばまり口縁は強く外反する。口縁部のヨコナデはゆるく全体的に整形はよくない。遺物点数は少ないが、4



第 50 図 SK19・21・22・24・25 遺物実測図



第 51 図 SK22・24・26 P 06・07 実測図

は大きめの破片であり当調査区の中心時期である弥生時代中期中葉から後半の遺物を含まないためSK22は弥生時代前期末から中期初頭と考えたい。

SK24は土坑でSK21の東にある。長軸2.8 m以上×短軸2.4 mのいびつな円形をしている。南部は落ち込みがあるため範囲がわからなくなっている。底は起伏があるが概ね平坦である。検出面からの深さは北部が深く0.05～0.1 mである。第50図5～11の遺物が出土している。

第50図5・6は甕の口縁部である。鋤先状口縁は水平に近く端部は丸みがある。内面への出もははっきりしている。7は甕の脚台で、ハの字状に開く。8は広い平底をもつ甕の底部である。小破片であるが全体的に赤い焼きをしている。9は壺の口縁部の小破片で、直立した頸部からゆるく外反する。10は広口壺の口縁部で器壁が厚い。11は器台で器壁が非常に厚い。下に向け図化したが天地は不明である。これらの遺物からSK24は弥生時代中期後半と考えられる。

SK26は土坑でSB04の南西にある。径1.4～1.6 mの不整な円形をしている。検出面からの深さは0.15 mで底は平坦である。第49図のSK26と遺構番号が重複している。

P 06・P 07はSK22の南にある。P 06は径0.6 m、検出面からの深さ0.15 mの小穴である。P 07は長軸1.5 m×短軸0.7 mの楕円形の土坑である。底は平坦で、深さは0.1 mと浅い。

SK26・P 06・P 07は図化できる遺物の出土はなく、遺構の時期は不明である。

SK27・SK28・SK29・SK30(Ⅱ区)・SK31・SK32

(第52図 図版8の5・6 遺物 第53図)

第52図はⅡ区の中央北東でSB04南西の部分図である。SK27からSK32は土坑である。SK27はSB04の南西にある。長軸2.0 m×短軸1.3 mの小判形をしている。底は若干の起伏があるが概ね平坦である。検出面からの深さは北部が深く0.2 mである。

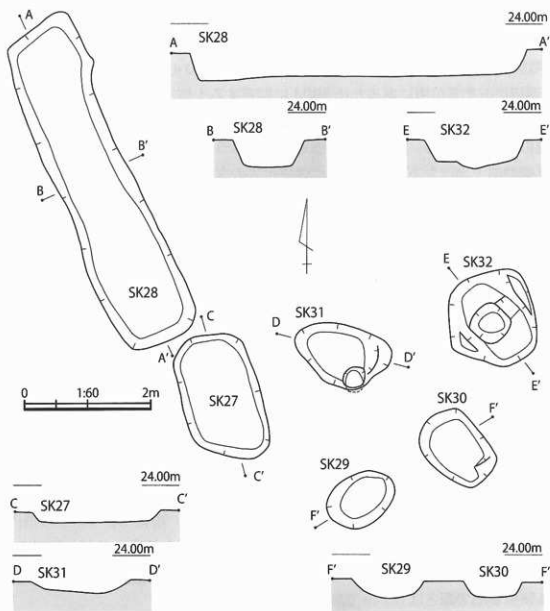
SK29からSK31はSB04の南にある、掘り形は全体的に丸い形状をしている。SK29は長軸2.0 m×短軸1.3 mの楕円形をしている。検出面からの深さは0.3 mである。第53図8の甕が出土している。口縁端部に断面三角形のキザミがある突帯を張り付けている。弥生時代前期末から中期初頭の遺物である。

SK30(Ⅱ区)は長軸2.0 m×短軸1.3 mの円みがある長方形をしている。検出面からの深さは0.3 mである。第51図9の甕が出土している。鋤先状口縁の内面への出が大きく上面がほぼ平坦で外面端部はやや面をもつ。弥生時代中期後半の遺物と考えられる。

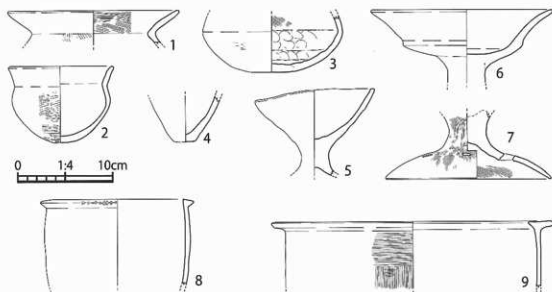
SK31は長軸1.6 m×短軸1.0 mのやや不整な楕円形をしている。検出面からの深さは0.3 mである。

SK32はSB04の南にある。径1.0 mのいびつな円形をしている。南西と北東に段があり底は南東―北西方向に長い丸みがある長方形となっている。検出面からの深さは0.5 mである。底は起伏があり中央がくぼむ。

SK27・SK31・SK32は図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。SK29・



第 52 图 SK27・28・29・30(Ⅱ区)・31・32 实测图



第 53 图 SK28・29・30(Ⅱ区) 遺物实测图

SK30(Ⅱ区)は1点のみのため遺構の時期は不明としておきたい。

SK28はSB04の東にある。長辺5.4m×短辺1.2～1.4mの長方形をしている。底は概ね平坦で台形状の掘り形である。SB04の西辺から0.4～1.0m離れ平行し、長さもSB04の西辺に収まる位置にあるためSB04に関連する土坑である可能性が高い。第53図1～7の遺物が出土している。

1は甕の口縁部である。内面は屈曲部近くまでヘラケズリされている。2は小型の壺である。外面胴部上半は左下がり、下半はほぼ水平のタタキが施される。3は壺の胴部である。外面調整はハケメのあとナデで、内面は整形時の調整はされておらずユビオサエ・輪積み痕が顕著に残る。4は小さい壺の底部と思われる。全体的に粗い整形で、底は2.0～2.4cmの楕円形をしている。5は台付の鉢である。外面はしわのようなひび割れが目立ち粗雑な成形・整形でゆがみが大きい。台の接合部分も偏っている。6は高坏の坏部で、やや均整さに欠ける。器壁が厚く脚の残存部分は柱実である。7は器台の脚部である。低く広く踏ん張った形状で、焼成前に開けられた孔が4つある。均整な配置ではない。ハケメの目が細かい。これらの遺物からSK28の時期は、古墳時代前期である。

SK35・SK44・SK45 (第54図)

第54図は個別の遺構を集めたものである。SK35は土坑でⅡ区の北辺東側、SB04の北東にある。長軸1.7m×短軸0.8、長辺0.9m以上の丸い台形をしている。深さが検出面から0.2mの起伏がある底で、東に寄って深さが0.25mのくぼみがある。

SK44は土坑でⅠ区のSB35の西辺にある。長軸1.2m×短軸1.0m以上の楕円形状である。SB35に切られている。全体的にみて丸く途中で屈折し深くなる掘り形である。

SK45は土坑でⅠ区のSB35とSB36の間にある。径0.7～0.9mの不整な円形をしている。丸い掘り形で深さは0.1mである。

SK35・SK44・SK45は図化できる遺物の出土はなく、遺構の時期は不明である。

SK40(Ⅱ区)・P02・P03・P05・P16・P17(第55図)

第55図はⅡ区の東でSX02の南の部分図である。SK40は土坑である。長さ2.0m×幅0.6mの短い溝状をしている。検出面からの深さが0.1mの丸い掘り形をしている。

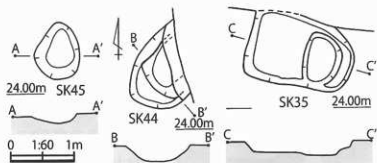
P02は土坑である。長軸1.1m×短軸0.8、検出面からの深さ0.05mの浅く不整な四角形をしている。P03は径0.7mの円く、深さ0.7mの柱穴状の小穴である。P05は一辺0.6m、深さ0.1mの四角い小穴である。P16・P17は不整形の小穴である。P16は長軸1.0m×短軸0.3～0.45mで深さ0.1m、P17は長軸0.7m×短軸0.6で深さ0.05mの大きさである。

上記の遺構は図化できる遺物の出土はなく、遺構の時期は不明である。

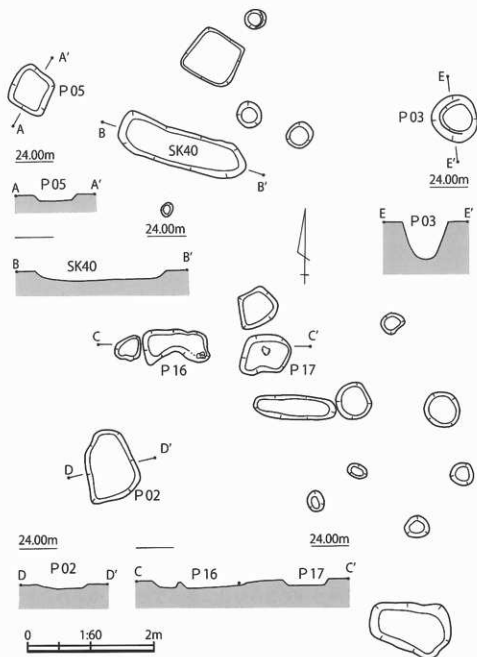
SK53・SK54・SK55 (第56図 図版8の7 遺物 第57図)

第56図はⅡ区の西半中央部の部分図である。SK53は土坑でSB38の西にある。径1.4

～1.8 mの円形をしている。北側は斜めに掘り下げ途中からまっすぐ掘ったような形状をしている。検出面からの深さは0.5 mあり、底は概ね平坦である。南側にも幅0.4 m、深さ0.2 mの落ち込みがあるが、SK53 と関係があるか、切り合う遺構なのかは分からない。



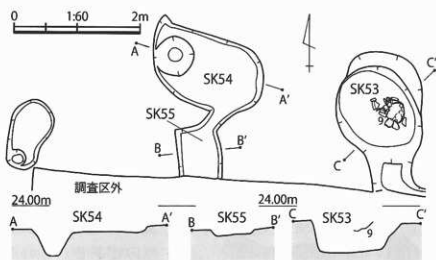
第54図 SK35・44・45実測図



第55図 SK40(Ⅱ区) P02・03・05・16・17実測図

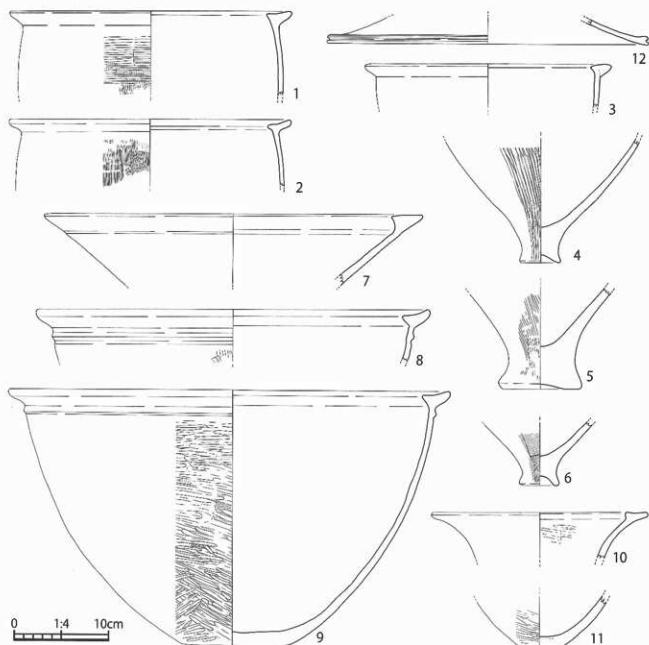
第53図の多くの遺物が出土している。

1～3は甕である。1の鋤先状口縁の内面への出は少なく、幅は比較的狭く厚みがある。2の鋤先状口縁外側は上方を向き厚みが薄い。ハケメの条線のはつきりしないところが多い。3は断面形状が丸みのある三角形の鋤先状口縁である。4～6は脚台がつく甕の底部である。4の内面底はゆるくとなる。5は底のくぼみが浅く、厚みと幅がある脚台である。7～8は鉢である。口縁部は三角形で上面は平坦である。胴部は直線的にすばまっていく。やや赤みがある焼きをしている。8と9は鋤先状口縁の内面への出が強く厚みがあり、外側が上方に反る。口縁下の近いところに突帯が1条めぐる。8は突帯下側の貼り付け時のナデ



第 56 図 SK53・54・55 実測図

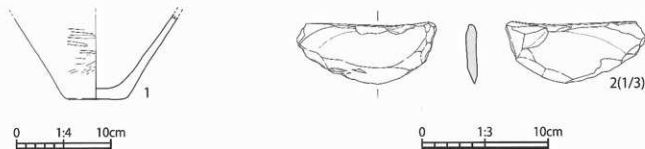
が強い。胴部外面はハケメのあとナデられている可能性がある。9の外面調整のヘラミガキは胴部上半に隙間がおおく下位の調整がハケメである。10は広口壺の口縁部である。口径が比較的小さく器壁が厚い。11は壺の底部で、精良な胎土で赤みがある焼きである。一部に特に赤い部分が



第 57 図 SK53 遺物実測図

あり丹塗の可能性もある。12は蓋である。口縁端部の沈線が非常に深い。これらの遺物からSK53の時期は弥生時代中期後半である。

SK54は土坑である。長軸1.9m×短軸1.1mの小判形をしている。深さは検出面から0.1mで西側は小穴状にくぼみ0.4mある。SK55とつながっているが切りあいは不明である。SK55は長辺0.9m以上×幅0.7m、深さ0.1mの四角い土坑で南は調査区の外へ続く。ともに図化できる遺物の出土はなく遺構の時期は不明である。



第58図 表採 出土遺構不明遺物実測図

第58図は表採遺物と出土遺構が不明の遺物である。1は甕の底部である。精良な胎土で赤く焼かれている。2は石庖丁の未製品である。鈍い光沢がある灰色で石材は片岩と思われる。刃は鋭利な部分もあるが図上裏面の刃部は研磨範囲が狭く刃に対して垂直方向の稜が残っており、また完全に研ぎだされずにぶい部分もある。背には背に対して平行する稜がはっきり残る。持ち手部分は研磨されておらず孔もあけられていない。刃部は欠損が多くどの段階で割れたのかかわからないが、研磨前の剥離がみられることから製作途中で遺棄されたものかもしれない。

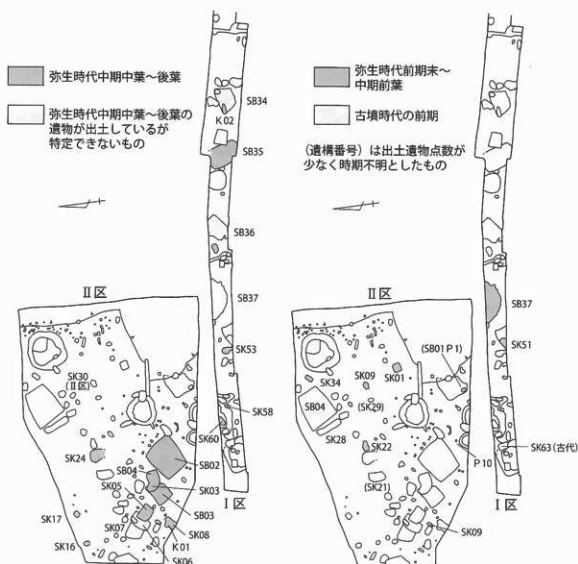
(3) 総括

水洗遺跡Ⅰ区・Ⅱ区の発掘調査では竪穴建物9軒（ほかに可能性があるもの2軒SK06・SK37）、甕棺墓2基、円形周溝状遺構6基、溝状遺構4条、土坑73基、ほか多数の小穴が見つかった。時期は弥生時代前期末から中期と古墳時代前期・古代である。

(2) 遺構と遺物の部では時期別の構成ではないため、第59図に遺構の時期別の配置図を示す。SB02とSB04はそれぞれ弥生時代中期中葉から後葉、古墳時代前期の竪穴建物であるが、規模・形態は非常に似ている。竪穴の長辺は7mを超えやや台形状の形をしており、4本柱の短い柱間と竪穴の長い辺が平行している。異なっている点はSB04に炉跡と竪穴の辺に土坑があることである。また遺構埋土による分別が不明なため遺構・遺物から時期が分かる遺構は限られている。

弥生時代前期末から前葉の遺構はⅠ区の西半とⅡ区全般に広がる。SB37は竪穴住居と考えられるが、円形であることから弥生時代前期末から中期前葉に含めている。出土遺物は弥生時代中期後半のものであるが別の遺構が切り合っていたと考えている。

弥生時代中期中葉から後半の遺構は調査区の全般に広がり、遺物量も多い。Ⅱ区の東半は少ない傾向にある。甕棺墓は2基見つかった。大きさから成人用甕棺ではない。散



第 59 図 時期別遺構配置図

発的でその周囲に土壌墓、その可能性がある土坑はなく墓域として形成されていない。円形周溝状遺構は時期の特定が難しい。当調査区では弥生時代後期の遺構はなく遺物も微々たるものであり、弥生時代中期の遺構と考えざるをえないが東接する二反田遺跡・宮ノ前遺跡を考慮し不明としておきたい。

古墳時代前期の遺構はII区の北半に限られ竪穴建物SB04とその周囲に限られる。古代の遺構はSK63の土坑1基のみである。

各時期に共通する点は竪穴建物の間に切り合い関係がなく、規模がある方形の遺構は向きが概ねそろっていることである。前者は当調査区が断続的に遺跡として続き、後者は地形に影響されて遺構が作られたと考えられる。

当遺跡の南西の宿町遺跡では弥生時代前期から中期前半の一重の環濠や竪穴建物と貯蔵穴が多数見つかり集落の中心的遺跡であること、東には二反田遺跡・宮ノ前遺跡があり弥生時代中期後半から古墳時代前期の集落であることからそれらの集落の外縁であったと思われる。この地域の遺跡の動態に言及する力量はないが、圃場整備事業にともない多くの発掘調査がおこなわれ歴史の一端が明らかになることを望む。

表1 遺物観察表 1

種別	国産	道 橋	光澤	色 澤	結 晶	法 規 (cm)			現 存 数	出 土 材 質	調 査		色 調	備 考			
						長さ	幅	厚さ			外面	内面			外 面 内 面		
05 01		5801P1	R-31	赤生土層	—	—	—	2.9	口縁部小片	～4mmの砂を多く含む 長石等	ヨコナデ	ナデ	灰色・白色に はいり混				
05 02		5801P1	R-30	赤生土層	—	—	—	6.0	底面片	～3mmの砂を含む 石・長石・ 片岩等	工目によるナデ	ナデ	にはいり混 にはいり混				
05 03	05 04	5802	R-47	赤生土層	—	33.0	—	6.5	1/2	砂少なく水磨されたように粗目	ヘラミガキ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	明赤褐色 赤褐色	赤い塊を みせ			
05 04	05 05	5802	R-61	赤生土層	—	22.2	—	11.8	口縁部片	砂少なく水磨されたように粗目	ヘラミガキ ヨコナデ	ナデ	赤褐色 赤褐色	赤い塊を みせ			
05 05	05 06	5802	R-43	赤生土層	—	21.6	—	10.3	1/2	～1mmの砂をやや多く含む 1～5mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ	ヨコナデ	粗 粗				
07 01	07 02	5802	R-25	赤生土層	—	32.0	—	9.2	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケミ後ヨコナデ ナデ ハケミ	ヨコナデ ハケミ 後ヨコナデ ナデ	にはいり混 粗				
07 03	07 04	5802	R-21	赤生土層	—	32.0	—	5.3	口縁部片	～1mmの砂を多く含む 赤褐色 板・片岩・角閃石等	ヨコナデ	ヨコナデ	粗 粗				
07 05	07 06	5802	R-11	赤生土層	—	34.1	—	6.4	口縁部片	～1mmの砂を多く含む	ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ ナデ	にはいり混 粗				
07 07	07 08	5802	R-42	赤生土層	—	34.0	—	4.0	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	にはいり混 粗				
07 09	07 10	5802	R-30	赤生土層	—	38.0	—	5.3	口縁部片	～1mmの砂をやや多く含む	ヨコナデ ハケミ	ナデ	にはいり混 粗				
07 11	07 12	5802	R-6	赤生土層	—	28.2	—	6.8	口縁部小片	～1mmの砂を多く含む	ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ ナデ	灰褐色 粗				
07 13	07 14	5802	R-34	赤生土層	—	28.0	—	4.8	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ	粗 粗				
07 15	07 16	5802	R-35	赤生土層	—	24.0	—	5.2	口縁部片	～1mmの砂をやや多く含む	ヨコナデ	ナデ	にはいり混 粗				
07 17	07 18	5802	R-40	赤生土層	—	24.2	—	10.0	口縁部片	～2mmの砂をやや多く含む 片 岩・長石・赤褐色板等	ヨコナデ ナデ 工目による ナデ ユビオサエ	にはいり混 粗					
07 19	07 20	5802	R-37	赤生土層	—	17.5	—	4.2	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ナデ	にはいり混 粗				
07 21	07 22	5802	R-36	赤生土層	—	19.6	—	5.2	口縁部片	～1mmの砂をやや少なく含む	ヨコナデ ヘラミガキ	ナデ	にはいり混 粗				
07 23	07 24	5802	R-15	赤生土層	—	—	—	5.4	10.2	底面片	～1mmの砂を含む	ハケミ	ナデ	にはいり混 粗			
07 25	07 26	5802	R-27	赤生土層	—	—	—	6.0	6.7	底面片	～1mmの砂を含む	ハケミ	ナデ	粗 粗			
07 27	07 28	5802	R-26	赤生土層	—	—	—	6.5	6.7	底面片	～1mmの砂を含む	ハケミ	ナデ	にはいり混 粗			
07 29	07 30	5802	R-29	赤生土層	—	—	—	8.3	3.4	底面片	～1mmの砂をやや少なく含む	工目によるナデ	ナデ	灰褐色 粗			
07 31	07 32	5802	R-32	赤生土層	—	—	—	7.4	4.8	底面片	～1mmの砂を含む	ナデ	ナデ	粗 粗			
07 33	07 34	5802	R-18	赤生土層	—	—	—	10.6	3.2	底面片	～2mmの砂・片岩を含む	ナデ	ナデ	にはいり混 粗			
07 35	07 36	5802	R-33	赤生土層	—	—	—	10.2	5.7	底面片	～1mmの砂をやや多く含む	ナデ	ナデ	明赤褐色 にはいり混			
07 37	07 38	5802	R-5	赤生土層	—	—	—	10.3	8.3	底面片	～2mmの砂を含む	ハケミ	ナデ	にはいり混 粗			
07 39	07 40	5802	R-20	赤生土層	—	—	—	9.4	6.9	底面片	～1mmの砂を含む	ヘラミガキ	ナデ	粗 粗			
07 41	07 42	5802	R-16	赤生土層	—	18.5	—	6.2	口縁部片	～1mmの砂を多く含む	ヨコナデ ハケミ	ナデ	にはいり混 粗				
07 43	07 44	5802	R-22	赤生土層	—	16.9	—	7.3	7/3	～2mmの砂を多く含む 片岩等	ナデ	ナデ	灰褐色 粗				
07 45	07 46	5802	R-22	赤生土層	—	30.3	—	7.7	口縁部片	～1mmの砂を多く含む	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	明赤褐色 にはいり混				
07 47	07 48	5802	R-44	赤生土層	—	26.2	—	25.2	1/2	断面片	砂のまじり少なく水磨したように 粗目 赤褐色板を含む	ヨコナデ ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ シロリ板	粗 粗	赤い塊を みせ		
07 49	07 50	5802	R-28	赤生土層	—	20.0	—	3.7	口縁部片	～1mmの砂を少なく含む	ハケミ ナデ	ヨコナデ ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	粗 粗	赤い塊を みせ		
07 51	07 52	5802	R-4	赤生土層	—	24.0	—	8.0	断面片	～1mmの砂を含む 赤褐色板等・ やや粗目	不明	不明	明褐色 にはいり混				
08 01	08 02	5802	R-45	赤生土層	—	—	—	18.8	19.0	断面片	砂少なく水磨されたように粗目 赤褐色板を含む	不明	シロリ板	粗 粗			
08 03	08 04	5802	R-1	赤生土層	—	—	—	16.3	7.8	断面片	～1mmの砂を含む やや粗目	ヘラミガキ	ナデ	粗 粗	赤みがある塊を みせ		
08 05	08 06	5802	R-48	赤生土層	—	16.5	—	4.5	口縁部片	水磨したような粗目 ～3mmの砂 を多く含む	不明	不明	明赤褐色 粗				
08 07	08 08	5802	R-17	赤生土層	—	30.2	—	10.8	口縁部片	～1mmの砂を含む 雲母又は角閃 石の光る砂目を含む	ヨコナデ ナデ ヘラミガ キ	ナデ	にはいり混 粗	粗文			
08 09	08 10	5802	R-13	赤生土層	—	25.0	—	4.6	口縁部片	～1mmの砂を含む 赤褐色板等	ヨコナデ	ヨコナデ	粗 粗				
08 11	08 12	5802	R-38	赤生土層	—	28.0	—	10.3	口縁部片	～1mmの砂をやや少なく含む	ヨコナデ ナデ ヘラミガ キ	ナデ ヘラミガ キ	にはいり混 粗				
08 13	08 14	5802	R-8	赤生土層	—	—	—	6.0	5.3	底面片	～1mmの砂を少なく含む	ハケミ	ハケミ ナデ	にはいり混 粗			
08 15	08 16	5802	R-9	赤生土層	—	—	—	5.8	6.0	底面片	～1mmの砂を含む 赤褐色板を含む	ヘラミガキ	ナデ	赤褐色 粗	丹違		
08 17	08 18	5802	R-19	赤生土層	—	—	—	5.5	6.5	底面片	～1mmの砂を含む	ヘラミガキ	ナデ	赤褐色 粗	丹違		
08 19	08 20	5802	R-14	赤生土層	—	—	—	3.4	8.7	底面片	～1mmの砂を含む	ヘラミガキ	ハケミ ナデ	にはいり混 粗			
08 21	08 22	5802	R-24	赤生土層	—	—	—	3.7	12.6	断面片	～1mmの砂を含む	ヘラミガキ	ハケミ ユビオサエ ナデ	にはいり混 粗			
08 23	08 24	5802	R-7	赤生土層	—	—	—	4.3	14.7	断面片	～1mmの砂 2～3mmの黒色の砂 を含む	ヘラミガキ ナデ	ナデ	粗 粗			
08 25	08 26	5802	R-10	赤生土層	—	—	—	4.2	9.3	底面片	～1mmの砂を含む	ヘラミガキ	ハケミ ナデ	粗 粗			
08 27	08 28	5802	R-45	赤生土層	—	—	—	7.0	26.3	1/4	～1mmの砂を含む	ナデ ヘラミガキ	ナデ ハケミ	粗 粗			

表1 遺物観察表 2

採年	調査 年度	遺物 番号	発掘 位置	土層 番号	土層 説明	位置 (m)		保存 状況	土質 説明	調査		色・面 内・面	備考				
						掘 深	掘 径			外面	内面						
08 採	15	SB02	8-23	赤生土層	—	26.8	—	9.2	口縁部片	1～5mmの砂礫を多く含む	ヨコナデ ハケミ後ナデ	ヨコナデ ナデ	にがい・黄褐色 にがい・黄褐色				
08 採	16	SB02	8-41	赤生土層	—	—	—	2.4	口縁部小片	1～3mmの砂礫を含む 石炭等	ナデ ハケミガキ	ナデ	にがい・黄褐色 にがい・黄褐色				
08 採	17	SB02	8-12	土壌部	○	12.2	—	3.5	1/2	～1mmの砂を少なく含む 赤褐色 土を含む	細粒ナデ	細粒ナデ	粗粒				
10 採	01	採掘 09 06	SB03	8-3	赤生土層	—	27.0	—	10.0	口縁部片	～1mmの砂を少なく含む 長石・角 閃石等	ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
10 採	02	採掘 09 06	SB03	8-40	赤生土層	—	—	5.2	12.1	断面片	～1mmの砂を含む 長石・片岩等	ナデ	ヨコナデ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色		
10 採	03	採掘 13 09	SB03	8-267	赤生土層	—	—	—	7.2	口縁部片	1～2mmの砂を多く含む 長石・片 岩等	ナデ	ナデ	ハケミガキ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色	断面文 最大径 31.4cm	
10 採	04	SB34P1	8-06	赤生土層	○	27.6	—	—	3.3	口縁部片	～1mmの砂を多く含む	ヨコナデ ハケミガキ?	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	01	SB03	8-131	赤生土層	○	20.2	—	—	6.2	口縁部片	～2mmの砂礫を含む	ナデ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色	キザミ		
11 採	02	SB03	8-132	赤生土層	○	24.0	—	—	6.2	口縁部片	～1mmの砂を含む 2～3mmの礫 を含む	ナデ ハケミ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	03	SB03	8-129	赤生土層	○	26.0	—	—	4.8	口縁部片	～3mmの砂礫をやや多く含む 片 岩・角閃石等	ヨコナデ ハケミ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	04	SB03	8-122	赤生土層	○	25.9	—	—	7.6	口縁部片	～3mmの砂礫をやや多く含む	ナデ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	05	SB03	8-130	赤生土層	○	22.9	—	—	6.2	口縁部片	～1mmの砂を含む	ナデ ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	06	SB03	8-137	赤生土層	—	34.0	—	—	18.0	口縁部・断面 片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	07	SB03	8-115	赤生土層	—	44.0	—	—	13.2	口縁部片	～1mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	08	SB03	8-140	赤生土層	○	70.0	—	—	21.0	口縁部片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	09	SB03	8-126	赤生土層	—	—	—	5.4	9.6	断面・口縁部 片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ハケミ	工具によるナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	10	SB03	8-139	赤生土層	—	—	—	5.3	12.5	断面片	～1mmの砂を含む	ハケミ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
11 採	11	SB03	8-141	赤生土層	○	18.0	—	7.3	14.7	底～断面片	～3mmの砂礫をやや多く含む 片 岩等	ハケミ ナデ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
12 採	01	SB03	8-116	赤生土層	○	26.4	—	5.4	19.6	断面・口縁部 片	～1mmの砂を含む	ハケミ	ナデ?	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
12 採	02	SB03	8-123	赤生土層	—	—	—	4.3	口縁部小片	～1mmの砂を含む	不明	不明	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色				
12 採	03	SB03	8-136	赤生土層	—	—	—	10.7	9.3	断面片	～2mmの砂を含む 片岩等	ハケミガキ?	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
12 採	04	採掘 09 07	SB03	8-127	赤生土層	○	12.7	12.4	14.5	1/2	～1mmの砂を含む 3～5mmの礫 が少し入る 角閃石・片岩等	ヨコナデ ハケミ ナデ	ナデ ヨコナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
12 採	05	SB03	8-128	赤生土層	○	26.9	—	—	10.2	口縁部片	～1mmの砂を含む	不明	不明	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色	全体的に赤い塊		
12 採	06	採掘 09 07	SB03	8-138	赤生土層	—	—	—	14.6	15.5	断面片	～1mmの砂をやや少なく含む	ハケミガキ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色		
12 採	07	SB03	8-125	赤生土層	○	21.0	—	—	3.7	口縁部片	黄褐色の砂を少なく含む	ハケミガキ	ハケミガキ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色	黒い塊の可能性あり		
12 採	08	SB03	8-124	赤生土層	○	24.0	—	—	5.2	口縁部片	～1mmの砂をやや多く含む 角 閃石等	ヨコナデ ハケミ後ナデ	ヨコナデ ハケミガキ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色	粗文		
12 採	09	SB03	8-118	赤生土層	○	18.0	—	—	11.0	口縁部片	～2mmの砂礫をやや多く含む 片 岩等 黒褐色の砂を含む	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
12 採	10	SB03	8-121	赤生土層	—	—	—	3.5	8.6	断面・口縁部 片	～3mmの砂礫をやや多く含む 片 岩・角閃石等	ハケミガキ	不明	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
12 採	11	採掘 09 07	SB03	8-117	赤生土層	○	15.6	9.7	14.8	底～断面片	～1mmの砂をやや多く含む 片 岩・角閃石等	ナデ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色	付付		
12 採	12	SB03	8-120	赤生土層	—	—	—	6.4	断面片	～1mmの砂を含む 片岩・長石・ 赤褐色土等	ハケミ	不明	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色				
12 採	13	SB03	8-119	赤生土層	—	—	—	7.0	5.7	断面片	～6ミリの砂礫をやや多く含む 片 岩・石炭等	ハケミガキ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
12 採	14	SB04	8-133	赤生土層	—	—	—	5.2	16.4	1/3	～1mmの砂を含む	ハケミ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
12 採	15	SB04	8-142	赤生土層	—	—	—	6.3	15.5	断面片	～1mmの砂を含む	ハケミ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	01	SB35	8-00	赤生土層	—	—	—	10.3	10.8	断面片	～1mmの砂を含む	ハケミガキ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	02	採掘 10 01	SB35	8-04	赤生土層	○	11.0	—	6.5	口縁部・断面 片	細い砂を含む	ナデ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	03	SB35	8-01	赤生土層	○	11.0	10.5	10.5	2/3	—	～3mmの砂礫を多く含む 片岩等	ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	04	SB35	8-02	赤生土層	○	10.8	10.3	14.9	3/4	—	～3mmの砂礫を多く含む 片岩・ 長石・角閃石等	ナデ ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	05	採掘 10 01	SB35	8-03	赤生土層	○	16.0	—	5.2	5.6	1/4	1～2mmの砂を含む 片岩・角 閃石等	ハケミガキ ナデ	ハケミガキ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色		
13 採	06	採掘 10 02	SB35	8-008	赤褐色 土層	19.5	12.9	9.9	3.9	3.9	断面片	石炭・角閃石等	不明	不明	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色	赤みがある乳白 色	
13 採	07	SB36	8-07	赤生土層	○	26.0	—	—	3.7	口縁部片	～1mmの砂を少なく含む 1～3 mmの礫を含む 片岩等	不明	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	08	SB37	8-08	赤生土層	○	25.8	—	—	10.4	口縁部・断面 片	～1mmの砂を多く含む 赤褐色 土を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	09	SB37	8-06	赤生土層	○	28.2	—	—	9.5	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	10	SB37	8-06	赤生土層	—	31.8	—	—	12.8	断面片	～1mmの砂を含む 中々多い	ヨコナデ ハケミ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	11	SB37	8-05	赤生土層	○	20.0	—	—	11.5	口縁部片	～1mmの砂を含む 中々少ない	ヨコナデ ハケミガキ	ヨコナデ ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			
13 採	12	SB37	8-08	赤生土層	—	—	—	4.7	10.0	断面片	～1mmの砂を含む	ハケミ	ナデ	粗粒 にがい・黄褐色 にがい・黄褐色			

表1 遺物観察表 3

年	月	日	遺構	発掘調査 番号	種類 ・ 種類	位置 ・ 深度	法量 (cm)			現 存 ・ 状況	動 土 ・ 材 質	調 査		備 考		
							度	口徑	底径			外周	内面			
18	07			SR37	R-83	弥生土層	—	—	5.4	8.7	底面片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ハケメ	ナデ	に白い内層 底面片	
18	08			SR37	R-70	弥生土層	—	—	0.5	7.4	底面片	～1mmの砂を含む	ハケメ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	01	10/04		SR37	R-85	弥生土層	○	22.0	—	8.0	口縁部片	～1mmの砂を含む 2～4mmの砂を含む 角閃石・片岩等	ヨコナデ ハケメ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	02	10/04		SR37	R-77	弥生土層	—	—	6.9	口縁部小片	～1mmの砂を含む 中や多い 片岩等	不明	ヨコナデ ナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	03	10/04		SR37	R-79	弥生土層	○	25.6	—	4.6	口縁部片	～1mmの砂を含む やや多く含む 1～2mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ 一部ハケメ	ヨコナデ ナデ	底面片 に白い内層	
19	04			SR37	R-86	弥生土層	—	—	13.5	7.4	底面片	～2mmの砂を含む 石灰・片岩等	ヘラミガキ ナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	05	10/05		SR37	R-67	弥生土層	—	—	11.1	11.6	底面片	～1mmの砂を含む	ナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	06	10/03		SR37	R-74	弥生土層	—	—	5.8	4.8	底面片	～1mmの砂を含む	ナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	07			SR37	R-65	弥生土層	—	—	9.3	43.3	1/4	～1mmの砂を含む 中や多い 片岩等	ナデ ハケメ ヘラミガキ	ハケメ	底面片 に白い内層	
19	08	10/05		SR37	R-72	弥生土層	○	22.8	○	10.0	10.1	1/4	～1mmの砂を含む 中や多い 片岩等	不明	ナデ	底面片 に白い内層
19	09			SR37	R-84	弥生土層	○	30.0	—	5.3	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	10			SR37	R-78	弥生土層	○	30.2	—	7.1	口縁部片	～1mmの砂を含む 中や多い 片岩等	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	底面片 に白い内層	
19	11			SR37	R-87	弥生土層	—	—	5.5	4.7	底面片	～1mmの砂を含む 角閃石・片岩等	ナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	12			SR37	R-82	弥生土層	—	—	10.8	9.5	底面片	～1mmの砂を含む	ヘラミガキ ナデ	ヨコナデ	底面片 に白い内層	
19	13			SR37	R-81	弥生土層	—	—	14.7	8.0	底面片	～1mmの砂を含む	ヘラミガキ ヨコナデ	ナデ ハケメ ヨコナデ	底面片 に白い内層	
19	14			SR37	R-73	弥生土層	○	11.6	—	10.7	14.0	3/4	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケメ ナデ	ヨコナデ ナデ	底面片 に白い内層
19	15			SR37	R-80	弥生土層	○	9.8	—	10.7	13.8	1/3	～1mmの砂を含む 角閃石等	ヘラミガキ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	底面片 に白い内層
19	16			SR37	R-71	弥生土層	—	—	4.4	5.0	上部片	～1mmの砂を含む	ハケメ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	17			SR37	R-69	弥生土層	—	—	5.1	5.8	上部片	～1mmの砂を含む	ハケメ	ナデ	底面片 に白い内層	
19	18	12/09		SR37	R-89	弥生土層	○	18.0	—	4.2	口縁部片	微細な砂を含む	不明	ナデ	底面片 に白い内層	
21	01	10/06		SK51	R-232	弥生土層	○	24.1	—	7.1	口縁部片	～3mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ ハケメ後ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ一部ハケメ	底面片 に白い内層	
21	02			SK51	R-230	弥生土層	—	—	5.8	8.7	底面片	～1mmの砂を含む やや多く含む	ハケメ	ハケメ 工具によるナデ	底面片 に白い内層	
21	03			SK51	R-233	弥生土層	—	—	7.1	7.0	底面片	～4mmの砂を含む やや多く含む 片岩・石炭等	ハケメ	不明	底面片 に白い内層	
21	04			SK51	R-231	弥生土層	—	—	8.1	7.8	底面片	～4mmの砂を含む 片岩・片岩等	ヘラミガキ ハケメ	工具によるナデ ナデ	底面片 に白い内層	
21	05	10/06		SK51	R-229	弥生土層	—	—	4.5	1.8	底面片	～1mmの砂を含む やや多く含む	ユビオサエ	ナデ	底面片 に白い内層	
21	06	10/06		SK51	R-272	石炭層	—	—	5.0	0.4	10.6g	片岩	ナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
21	07	10/06		SK51	R-273	土製品	—	—	2.5	1.2	1.2	ナデ	ナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
23	01	10/07		SR04	R-60	古式土層	○	12.0	—	9.7	口縁部片	～3mmの砂を含む 片岩・石炭等	ナデ ハケメ ハケメ後ナデ	ハケメ 工具によるナデ	底面片 に白い内層	
23	02	10/07		SR04	R-59	古式土層	○	14.0	—	7.6	口縁部片	～1mmの砂を含む 1～4mmの砂を含む 石炭等	ヨコナデ タタキ ハケメ	ヨコナデ ハケメヘラミガキ	底面片 に白い内層	
23	03	10/07		SR04	R-56	古式土層	○	15.6	—	6.3	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケメ	ハケメ ヘラミガキ	底面片 に白い内層	
23	04	10/07		SR04	R-57	古式土層	○	17.8	—	7.8	口縁部片	～1mmの砂を含む 2～5mmの砂を含む	ヨコナデ タタキ	ヨコナデ ヘラミガキ	底面片 に白い内層	
23	05	10/08		SR04	R-50	古式土層	—	—	2.0	8.5	底面片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ナデ一部ハケミガキヘラミガキ後ヘラミガキ	ナデ	底面片 に白い内層	
23	06	10/08		SR04	R-51	古式土層	—	—	8.2	底面片	～2mmの砂を含む 石灰・片岩等	ヨコナデ ハケメヘラミガキ	ナデ	底面片 に白い内層		
23	07			SR04	R-53	古式土層	○	10.0	—	2.5	1/5	～1mmの砂を含む 少ない	ナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
23	08	10/09		SR04	R-54	古式土層	○	10.7	—	3.0	口縁部片	～2mmの砂を含む 石灰・片岩等	ユビオサエ	ユビオサエ	底面片 に白い内層	
23	09			SR04	R-55	古式土層	○	10.4	—	2.5	1/2	～2mmの砂を含む 光る砂を含む	ユビオサエ	ナデ	底面片 に白い内層	
23	10	10/09		SR04	R-58	古式土層	○	13.2	○	8.0	6.5	1/4	～3mmの砂を含む 中や多い 石炭等	ナデ	ハケメ	底面片 に白い内層
23	11			SR04	R-62	古式土層	○	16.0	—	6.3	口縁部片	～1mmの砂を含む 1～5mmの砂を含む 中や多い 片岩・石炭等	ヨコナデ ナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ後ナデ	底面片 に白い内層	
23	12			SR04	R-52	古式土層	○	17.9	—	3.8	口縁部片	～5mmの砂を含む 少ない 石灰・片岩等	ヨコナデ ナデ ハケメ	ナデ	底面片 に白い内層	
25	01	11/01		K-01	R-201	弥生土層	—	—	31.9	8.8	底面片	～2mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ ヘラミガキ	ナデ 一部ハケメ	底面片 に白い内層	
26	01	11/03		SK08	R-180	弥生土層	—	—	7.3	17.0	底面片	～2mmの砂を含む 片岩等	工具によるナデ	ナデ	底面片 に白い内層	
26	02			SK08	R-178	弥生土層	○	49.0	—	4.5	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	底面片 に白い内層	
26	03	11/04		SK08	R-270	石炭層	—	—	4.4	10.9	8.5	片岩	ナデ	底面片 に白い内層		
28	01	11/02		K-02	R-264	弥生土層	—	—	32.8	12.1	19.4	底面片	～1mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ ナデ ヘラミガキ	ナデ ハケメ	底面片 に白い内層
28	02	11/02		K-02	R-265	弥生土層	—	—	31.7	5.3	36.7	底面片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ナデ一部ハケメ	底面片 に白い内層

表1 遺物観察表 4

探検隊	遺物	発掘場所	種類	形状	長さ (cm)			厚さ (mm)	重量 (g)	保存	土質	調査		色澤	備考		
					口縁部	底面	断面					外面	内面				
30期 01	SK17	R-211	弥生土器	土器片	○	33.0	—	6.4	口縁部片	幾層な砂を含む	角閃石等	ヨコナデ	ハケミ	ナデ	灰褐色	に白い漬	
30期 02	SK17	R-205	弥生土器	土器片	—	—	—	4.7	8.8	底面片	～1mmの砂をやや多く含む	ハケミ	ナデ	ナデ	黄褐色	に白い漬	
30期 03	SK17	R-206	弥生土器	土器片	—	—	—	8.4	8.5	底面片	～1mmの砂を含む	ハラミガキ	ナデ	ナデ	に白い漬	に白い漬	
30期 04	SK17	R-207	弥生土器	土器片	—	11.9	—	12.2	13.4	2/3	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ハケミ	ヨコナデ	ナデ	ハケミ	に白い漬
33期 01	SK05	R-256	弥生土器	土器片	○	23.2	—	7.5	口縁部片	～3mmの砂を多く含む	片岩等	ヨコナデ	ハケミ	ヨコナデ	ハケミ	黄褐色	に白い漬
33期 02	SK46	R-225	弥生土器	土器片	○	28.2	—	3.0	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	不明	不明	不明	黄褐色	に白い漬	
33期 03	SK46	R-224	弥生土器	土器片	○	31.4	—	6.7	口縁部片	～1mmの砂を含む	不明	不明	不明	不明	黄褐色	に白い漬	
33期 04	SK46	R-227	弥生土器	土器片	○	36.0	—	20.0	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ハケミ	ヨコナデ	ナデ	灰褐色	に白い漬	
33期 05	SK46	R-226	弥生土器	土器片	○	10.9	—	8.8	7.5	底面片	～4mmの砂を多く含む	片岩等	ハケミ	不明	不明	黄褐色	に白い漬
33期 06	SK46	R-223	弥生土器	土器片	○	24.8	—	7.8	11.5	1/3	～1mmの砂をやや多く含む	片岩等	ヨコナデ	ハラミガキ	ヨコナデ	ナデ	黄褐色
33期 07	SK46	R-228	弥生土器	土器片	—	—	—	14.0	14.1	断面片	～1mmの砂を含む	赤褐色色等	ハラミガキ	ハケミ	ナデ	黄褐色	に白い漬
36期 01	SK01	R-260	弥生土器	土器片	○	28.0	—	4.0	口縁部片	幾層な砂を少し含む	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	に白い漬	に白い漬	
36期 02	SK02	R-253	弥生土器	土器片	○	18.0	—	3.7	口縁部片	～1mmの砂を含む	ハケミ	ヨコナデ	ハラミガキ	ヨコナデ	に白い漬	に白い漬	
36期 03	SK02	R-252	弥生土器	土器片	—	—	—	4.3	5.9	底面片	～2mmの砂をやや多く含む	ハケミ	ナデ	ナデ	黄褐色	に白い漬	
36期 04	SK03	R-254	弥生土器	土器片	—	—	—	5.1	口縁部小片	～4mmの砂を含む	石英等	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	に白い漬	に白い漬	
36期 05	SK02	R-114	弥生土器	土器片	—	—	—	8.1	8.4	底面片	～3mmの砂を含む	片岩等	不明	ナデ	ナデ	に白い漬	に白い漬
36期 06	SK58	R-245	弥生土器	土器片	○	28.2	—	3.6	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	黄褐色	に白い漬	
36期 07	SK58	R-268	弥生土器	土器片	○	16.5	—	4.5	15.8	?	不明	不明	不明	不明	黄褐色	に白い漬	
36期 08	P 10	R-248	弥生土器	土器片	—	—	—	6.6	口縁部小片	～2mmの砂を含む	角閃石等	ナデ	ナデ	ナデ	黄褐色	に白い漬	
36期 09	SK00	R-246	弥生土器	土器片	○	12.2	—	4.5	6.6	底面片	～1mmの砂を含む	角閃石等	ハケミ	ナデ	ナデ	黄褐色	に白い漬
36期 10	SK03	R-249	弥生土器	土器片	—	13.5	—	11.7	2.3	ほぼ定形	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	黄褐色	に白い漬	
41期 01	SK01	R-105	弥生土器	土器片	○	28.4	—	8.4	口縁部片	～4mmの砂を多く含む	片岩・石英・角閃石等	ナデ	ヨコナデ	ユビオサエ	ユビオサエ	ナデ	黄褐色
41期 02	SK01	R-106	弥生土器	土器片	○	26.1	—	12.2	口縁部片	～1mmの砂を含む	1～3mmの砂を多く含む	片岩等	ナデ	ハラミガキ	ナデ	ナデ	黄褐色
41期 03	SK01	R-108	弥生土器	土器片	○	26.0	—	9.5	口縁部小片	～4mmの砂を含む	片岩・角閃石等	ナデ	ナデ	ナデ	に白い漬	に白い漬	
41期 04	SK01	R-99	弥生土器	土器片	○	23.2	—	12.3	口縁部片	～1mmの砂を含む	1～4mmの砂を多く含む	片岩・角閃石等	ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	に白い漬
41期 05	SK01	R-101	弥生土器	土器片	○	22.6	—	13.0	口縁部片	～1mmの砂 1～3mmの砂を多く含む	片岩・角閃石・石英等	ナデ	ヨコナデ	ナデ	に白い漬	に白い漬	
41期 06	SK01	R-100	弥生土器	土器片	○	21.0	—	14.2	口縁部小片	～1mmの砂を含む	2～5mmの砂を多く含む	片岩・石英等	ナデ	ユビオサエ	ナデ	黄褐色	に白い漬
41期 07	SK01	R-110	弥生土器	土器片	—	18.8	—	8.5	口縁部小片	～3mmの砂を多く含む	片岩・角閃石等	ナデ	ユビオサエ	ナデ	黄褐色	に白い漬	
41期 08	SK01	R-104	弥生土器	土器片	—	16.8	—	9.7	口縁部片	～3mmの砂を含む	片岩・角閃石等	ナデ	ユビオサエ	ナデ	に白い漬	に白い漬	
41期 09	SK01	R-106	弥生土器	土器片	—	—	—	8.0	8.2	底面片	～3mmの砂を含む	片岩・角閃石等	ナデ	ユビオサエ	ナデ	黄褐色	に白い漬
41期 10	SK01	R-111	弥生土器	土器片	—	—	—	7.3	13.0	底面～底面片	～3mmの砂を多く含む	片岩・角閃石等	ナデ	ナデ	ナデ	に白い漬	に白い漬
41期 11	SK01	R-102	弥生土器	土器片	—	—	—	8.4	18.7	側面～底面片	～2mmの砂を含む	片岩・石英等	ナデ	ユビオサエ	ナデ	ハラミガキ	に白い漬
41期 12	SK01	R-107	弥生土器	土器片	○	27.8	—	14.6	口縁部片	～4mmの砂を含む	片岩・角閃石等	ナデ	ハラミガキ	ハラミガキ	に白い漬	に白い漬	
41期 13	SK01	R-103	弥生土器	土器片	—	—	—	7.8	口縁部小片	～1mmの砂を含む	1～3mmの砂を多く含む	片岩・角閃石等	ナデ	不明	不明	に白い漬	に白い漬
41期 14	SK01	R-109	弥生土器	土器片	○	14.0	—	3.8	口縁部片	～1mmの砂を含む	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	に白い漬	に白い漬	
41期 15	SK01	R-112	弥生土器	土器片	—	—	—	6.3	6.7	底面片	～3mmの砂を含む	片岩等	ハラミガキ	ハラミガキ	黄褐色	に白い漬	
41期 16	SK01	R-269	弥生土器	土器片	○	4.6	—	9.7	6.5	31.6g	片岩	不明	不明	不明	黄褐色	に白い漬	
41期 17	SK01	R-113	弥生土器	土器片	—	—	—	1.9	底面片	～1mmの砂を含む	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	に白い漬	に白い漬	
42期 01	SK34	R-216	弥生土器	土器片	○	26.0	—	10.5	口縁部片	～2mmの砂を含む	片岩等	ヨコナデ	ナデ	ナデ	に白い漬	に白い漬	
42期 02	SK34	R-214	弥生土器	土器片	○	31.1	—	12.7	口縁部片	～2mmの砂を含む	ヨコナデ	ハケミ	ヨコナデ	ナデ	黄褐色	に白い漬	
42期 03	SK34	R-215	弥生土器	土器片	○	36.4	—	11.7	口縁部片	～3mmの砂を含む	石英・片岩等	ヨコナデ	ハラミガキ	ハラミガキ	黄褐色	に白い漬	
42期 04	SK34	R-217	弥生土器	土器片	○	18.8	—	6.8	口縁部片	～2mmの砂を含む	角閃石等	不明	不明	不明	黄褐色	に白い漬	
42期 05	SK34	R-213	弥生土器	土器片	—	—	—	9.0	9.0	底面片	～2mmの砂をやや多く含む	石英等	ハラミガキ	ハラミガキ	黄褐色	に白い漬	
42期 06	SK38	R-221	弥生土器	土器片	○	15.0	—	6.4	口縁部片	～4mmの砂を多く含む	片岩・角閃石等	ヨコナデ	ナデ	ナデ	に白い漬	に白い漬	

表1 遺物観察表 5

探検 年度	遺跡 番号	遺物 種類	大塚 図号	法相 (cm)			発見 場所	出土 状況	調査 方法	調査 結果		備考					
				縦 長	横 長	厚さ				外面	内面						
42回 07	SK38	R-218		弥生土器 片	—	—	7.5	9.4	底面片	～4mmの砂線を多く含む 片岩等	ハケメ	ナデ	底面 に深い溝				
42回 08	SK38	R-222		弥生土器 片	—	—	8.0	6.7	底面片	～2mmの砂線を多く含む 片岩・ 角閃石等	ハケメナデ	ヘラミガキ	ナデ	明永淵 に深い溝			
42回 09	SK38	R-219		弥生土器 片	○	26.0	—	8.8	口縁部片	～2mmの砂を含む 5～6ミリの 線を含む 片岩・角閃石等	ヨコナデ	ハケメ?	ヨコナデ ナデ	に深い溝 に深い溝			
42回 10	SK38	R-220		弥生土器 片	○	20.2	—	6.6	口縁部片	～4mmの砂線を多く含む 片岩等	不明	不明	不明	に深い溝 に深い溝			
44回 01	SK05	R-155		弥生土器 片	○	30.0	—	12.0	口縁部片	～1mmの砂を含む 赤褐色色粒等	ヨコナデ	ハケメ	ナデ	不明	に深い溝		
44回 02	SK05	R-160		弥生土器 片	○	32.7	—	11.5	口縁部片	～2mmの砂を含む 赤褐色色粒等 片岩・角閃石等	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ ナデ	底面	に深い溝		
44回 03	SK05	R-161		弥生土器 片	○	36.2	—	11.2	口縁部片	～3mmの砂を含む 片岩・角閃 石・赤褐色色粒等	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ	不明	に深い溝		
44回 04	SK05	R-162		弥生土器 片	○	54.9	—	11.7	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ ナデ	不明	に深い溝		
44回 05	SK05	R-152		弥生土器 片	○	60.8	—	25.5	口縁部片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ヨコナデ	ヘラミガキ	ナデ	明永淵	に深い溝		
44回 06	SK05	R-143		弥生土器 片	—	34.2	—	8.5	口縁部片	～1mmの砂を含む 2～5mmの砂 を含む 片岩・角閃石等	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	不明	不明	に深い溝		
44回 07	SK05	R-145		弥生土器 片	—	—	5.4	9.2	底面片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ハケメ	ナデ	ナデ	底面 に深い溝			
44回 08	SK05	R-156		弥生土器 片	—	—	5.6	10.8	底面片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ハケメ	ナデ	ナデ	底面 に深い溝			
44回 09	SK05	R-157		弥生土器 片	—	—	5.2	12.5	底面片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ハケメ	ナデ	ナデ	底面 に深い溝			
44回 10	SK05	R-144		弥生土器 片	—	—	5.8	13.6	底面片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ハケメ	ナデ	ナデ	不明	に深い溝 に深い溝		
44回 11	SK05	R-158		弥生土器 片	—	—	5.3	15.0	底面片	～1mmの砂を含む	ハケメ	ナデ	ナデ	不明	に深い溝 に深い溝		
45回 01	SK05	R-159		弥生土器 片	—	—	7.8	14.7	底面片	～2mmの砂を含む 3～5mmの砂を含む 点々と含む	ヘラミガキ	ナデ	不明	不明	に深い溝 に深い溝		
45回 02	SK05	R-169		弥生土器 片	○	33.2	—	6.7	口縁部片	～1mmの砂を含む 片岩・角閃石 等	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	不明	不明	に深い溝 に深い溝	
45回 03	SK05	R-167		弥生土器 片	—	24.5	—	8.6	口縁部片	～3mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ	不明	不明	不明	不明	底面	
45回 04	SK05	R-150		弥生土器 片	○	24.1	—	6.8	口縁部片	～3mmの砂を含む 片岩・角閃 石・片岩等	ヨコナデ ナデ	ヘラミガキ	不明	不明	不明	底面	
45回 05	SK05	R-146		弥生土器 片	—	8.9	—	6.3	底面片	～3mmの砂線を多く含む 片岩 片岩等	ナデ	ナデ	不明	不明	不明	底面	
45回 06	SK05	R-148		弥生土器 片	—	11.4	○	11.4	底面片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ヨコナデ	ハケメ	ナデ	ヨコナデ	不明	不明	底面
45回 07	SK05	R-147		弥生土器 片	—	11.4	—	10.7	底面片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ハケメ	ナデ	ヨコナデ	不明	不明	底面
45回 08	SK05	R-163		弥生土器 片	—	10.5	—	7.5	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ ナデ	不明	不明	不明	底面
45回 09	SK05	R-276		弥生土器 片	—	11.3	—	13.7	底面片	～1mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ ナデ	不明	不明	不明	底面
45回 10	SK05	R-275		弥生土器 片	—	11.4	—	11.5	底面片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ハケメ	ヨコナデ ナデ	不明	不明	不明	底面
45回 11	SK05	R-154		弥生土器 片	—	32.7	—	4.9	2/3	～2mmの砂を含む 角閃石・赤褐色 色粒等	ハケメ	ヨコナデ	ナデ	ハケメ	不明	不明	底面
46回 01	SK06	R-153		弥生土器 片	○	62.0	—	18.1	口縁部片	～2mmの砂を含む	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 02	SK07	R-174		弥生土器 片	○	26.6	—	3.6	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 03	SK07	R-175		弥生土器 片	○	28.8	—	7.1	口縁部片	～3mmの砂を含む 片岩等	ヨコナデ	ハケメ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 04	SK07	R-173		弥生土器 片	○	30.0	—	6.1	口縁部片	～3mmの砂を含む 片岩・片 岩・角閃石等	不明	不明	不明	不明	不明	不明	底面
46回 05	SK07	R-176		弥生土器 片	—	—	7.3	10.9	底面片	～2mmの砂線を多く含む 片 岩等	ハケメ	ナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 06	SK07	R-177		弥生土器 片	—	—	—	4.4	底面片	～4mmの砂線を多く含む 片 岩等	不明	ナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 07	SK07	R-172		弥生土器 片	—	—	12.8	7.3	底面片	～1mmの砂を含む	ハケメ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	不明	不明	底面
46回 08	SK07	R-171		弥生土器 片	○	12.8	—	7.8	2/3	砂粒表面に少ない 赤褐色色粒等	ナデ	ナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 09	SK09	R-165		弥生土器 片	○	33.7	—	5.3	口縁部片	～3mmの砂を含む 片岩等	不明	ナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 10	SK09	R-168		弥生土器 片	○	35.0	—	5.0	口縁部片	～3mmの砂を含む	ナデ	ナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 11	SK09	R-170		弥生土器 片	○	27.2	—	20.0	口縁部片	～2mmの砂を含む	ナデ	ナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 12	SK09	R-166		弥生土器 片	—	—	6.8	6.3	底面片	～1mmの砂を含む 1～5mmの砂 を含む 片岩等	ヘラミガキ	ナデ	ナデ	不明	不明	不明	底面
46回 13	SK09	R-164		弥生土器 片	—	—	7.4	5.8	底面片	～1mmの砂を含む	ナデ	ナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 14	SK09	R-275		弥生土器 片	—	—	7.9	8.5	底面片	～2mmの砂を含む 片岩等	ハケメ	ナデ	不明	不明	不明	不明	底面
46回 15	P 14	R-249		弥生土器 片	○	25.0	—	4.4	口縁部片	黒褐色砂を少なく含む 黒直	不明	不明	不明	不明	不明	不明	底面
48回 01	SK16	R-147		弥生土器 片	○	21.0	—	9.7	20.4	1/6	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ナデ	ヘラミガキ	不明	不明	不明	底面
48回 02	SK16	R-203		弥生土器 片	○	22.0	—	4.1	口縁部片	黒褐色砂を少なく含む	ヨコナデ	不明	不明	不明	不明	不明	底面
48回 03	SK16	R-179		弥生土器 片	○	28.2	—	8.7	口縁部片	～1mmの砂を含む 赤褐色色粒等	ヨコナデ	不明	不明	不明	不明	不明	底面
48回 04	SK16	R-134		弥生土器 片	○	28.7	—	16.9	口縁部片	～5mmの砂を含む 2～5mmの砂 を含む 片岩・角閃石・片岩・片岩等	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	不明	不明	不明	底面

表1 遺物観察表 6

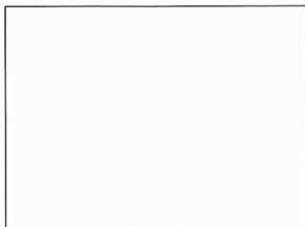
探検	図面	遺物	発掘調査 番号	種類	数量	寸法 (mm)			保存 状態	土 材 質	調査		備考
						口徑	長さ	底径			外面	内面	
48回	図面	SK16	R-200	弥生土器	1	32.6	—	22.4	口縁部片	～1mmの砂をやや少なく含む	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ナデ	新島 新島
48回	図面	SK16	R-210	弥生土器	1	33.2	—	9.4	口縁部片	～1mmの砂をやや少なく含む	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ナデ	新島 新島
48回	図面	SK16	R-202	弥生土器	1	26.7	—	7.2	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケミガキ	ヨコナデ ナデ	新島 新島
48回	図面	SK16	R-199	弥生土器	1	—	—	9.1	底面片	～1mmの砂をやや少なく含む	不明	ナデ	新島 新島
48回	図面	SK16	R-201	弥生土器	1	—	—	10.0	底面片	～1mmの砂をやや少なく含む	ヘラミガキ	ナデ	新島 新島
48回	図面	SK16	R-151	弥生土器	1	—	—	5.3	胴下部片	～5mmの砂を含む 片石・角閃石等	不明	ナデ?	新島 新島
48回	図面	SK16	R-204	弥生土器	1	30.0	—	5.3	口縁部片	微細な砂を少なく含む	不明	不明	新島 新島
48回	図面	SK16	R-183	弥生土器	1	—	—	3.0	胴下部片	～2mmの砂を含む 片石等	不明	不明	新島 新島
48回	図面	SK16	R-135	弥生土器	1	32.0	—	5.1	胴部片	～1mmの砂 2～4mmの砂を含む 片石・石炭等	ハケメ ヨコナデ	ハケメ	新島 新島
50回	図面	SK19	R-208	弥生土器	1	—	—	10.2	底面片	～1mmの砂を含む 角閃石(目立つ)	ハケメ ヨコナデ	ナデ	新島 新島
50回	図面	SK21	R-189	弥生土器	1	19.0	—	3.8	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	新島 新島
50回	図面	SK22	R-271	弥生土器	1	—	—	15.2	胴部片	～3mmの砂をやや多く含む 白色砂・雲母(目立つ)	ナデ	ケズリ	新島 新島
50回	図面	SK22	R-190	弥生土器	1	18.0	—	10.3	口縁部片	～3mmの砂を含む 片石・石炭等	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	新島 新島
50回	図面	SK24	R-197	弥生土器	1	30.2	—	2.6	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	新島 新島
50回	図面	SK24	R-192	弥生土器	1	34.0	—	3.7	口縁部片	～1mmの砂を含む 赤褐色砂	ヨコナデ ハケメ	不明	新島 新島
50回	図面	SK24	R-193	弥生土器	1	—	—	5.1	底面片	～1mmの砂を含む	ハケメ	ナデ	新島 新島
50回	図面	SK24	R-194	弥生土器	1	—	—	11.0	底面片	微細な砂を少なく含む	ヘラミガキ	ナデ	新島 新島
50回	図面	SK24	R-196	弥生土器	1	20.8	—	4.4	口縁部片	～2mmの砂をやや少なく含む	ヘラミガキ	ヘラミガキ	新島 新島
50回	図面	SK24	R-191	弥生土器	1	37.0	—	7.0	口縁部片	～4mmの砂を含む	ヨコナデ	ヨコナデ	新島 新島
50回	図面	SK24	R-195	弥生土器	1	—	—	12.0	下部	～1mmの砂を含む	ハケメ ヨコナデ	ナデ ハケメ	新島 新島
50回	図面	SK25	R-198	弥生土器	1	33.0	—	3.3	口縁部片	～1mmの砂が混入 角閃石等	ヨコナデ	ヨコナデ	新島 新島
53回	図面	SK28	R-186	古式土器	1	18.2	—	3.3	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケメ	ハケメ ナデ	新島 新島
53回	図面	SK28	R-185	古式土器	1	11.2	—	8.0	1/2角	～2mmの砂を含む 片石・赤褐色砂	ナデ	ナデ	新島 新島
53回	図面	SK28	R-181	古式土器	1	—	—	4.0	底面片	～1mmの砂を含む 石炭・灰石・角閃石等	ハケメ機ナデ	ハケメ ユビサキナデ	新島 新島
53回	図面	SK28	R-187	古式土器	1	—	—	2.1	底面片	～1mmの砂 2～3mmの砂を含む	ナデ	ナデ	新島 新島
53回	図面	SK28	R-188	古式土器	1	12.7	—	9.2	口縁部片	～1mmの砂 2～3mmの砂を含む 片石・石炭・灰石等	ヨコナデ	ナデ	新島 新島
53回	図面	SK28	R-182	古式土器	1	19.3	—	7.6	口縁部片	～5mmの砂を含む 片石・角閃石等	ヨコナデ	不明	新島 新島
53回	図面	SK28	R-184	古式土器	1	—	—	17.5	胴部片	～2mmの砂をやや少なく含む	ハケメ ナデ	ナデ ハケメ	新島 新島
53回	図面	SK29	R-200	弥生土器	1	16.2	—	9.0	口縁部片	～2mmの砂を含む 石炭等	ナデ	工具によるナデ	新島 新島
53回	図面	SK30	R-212	弥生土器	1	30.0	—	6.8	口縁部片	～1mmの砂を含む 片石・角閃石等	ヨコナデ ハケメ	ナデ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-237	弥生土器	1	30.0	—	8.8	口縁部片	～1mmの砂を含む	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ナデ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-243	弥生土器	1	30.0	—	7.0	口縁部片	微細な砂をやや少なく含む	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-244	弥生土器	1	26.2	—	4.7	口縁部片	～2mmの砂を含む 石炭・角閃石等	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-230	弥生土器	1	—	—	4.3	底面片	～2mmの砂を含む 片石等	ハケメ	ナデ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-239	弥生土器	1	—	—	8.8	底面片	～4mmの砂を含む 片石・石炭・角閃石等	ハケメ	不明	新島 新島
53回	図面	SK53	R-236	弥生土器	1	—	—	4.3	底面片	～1mmの砂をやや少なく含む 角閃石等	ハケメ	ナデ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-240	弥生土器	1	40.2	—	7.4	口縁部片	～1mmの砂を含む 角閃石等	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ナデ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-238	弥生土器	1	42.0	—	5.4	口縁部片	～1mmの砂を含む 片石・角閃石等	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ ハケメ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-246	弥生土器	1	46.7	11.1	27.0	1/2	～2mmの砂を含む 片石・石炭等	ヨコナデ ハケメ機ヘラミガキ	ヨコナデ ナデ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-242	弥生土器	1	23.0	—	4.9	口縁部片	～1mmの砂を含む 片石等	ヨコナデ	ハケメ	新島 新島
53回	図面	SK53	R-235	弥生土器	1	—	—	4.7	底面片	微細な砂を少なく含む 角閃石等	ヘラミガキ	不明	新島 新島
53回	図面	SK53	R-241	弥生土器	1	—	—	34.2	底面片	～1mmの砂を含む 石炭・角閃石等	ナデ	不明	新島 新島
56回	図面	表録	R-258	弥生土器	1	—	—	6.2	底面片	～1mmの砂を少なく含む 角閃石等	ヘラミガキ	ナデ	新島 新島
56回	図面	不明	R-274	弥生土器	1	11.0	4.0	8.0	71.1g	片石			新島 新島

図版

PLATES

〈凡例〉

遺物写真のキャプションは、以下の通りである。



遺構名

図番号



1. 調査地全景
西から



2. II区全景
南から



1. II区全体風景

北から



2. II区全体風景

西から



3. SB01

北東から



4. SK03・04

東から



5. SB02

北東から



6. SB02 遺物

南東から



7. SB03

北東から



8. SB03 遺物

東から



1. SB34・SK41

北東から



2. SK38(I 区)

東から



3. SK42・43

西から



4. SB36

北西から



5. SB35

西から



6. SB35 遺物

北東から



7. SB37

東から



8. SB37 遺物

北東から



1. SB38

東から



2. SK51

東から



3. SB04

北東から



4. SB04 炉

北東から



5. K 01・SK08

北東から



6. K 01

南西から



7. SK17

北西から



8. SK39(Ⅱ区)

北から



1. K 02

南から



2. K 02

南東から



3. K 02

北から



4. SD03・SK30

北から



5. SD05

北から



6. SK46

北から



7. SX01・SK02

北東から



8. SX02(Ⅰ区)SX03(Ⅰ区)周辺

東から



1. SK61

北から



2. SX02(Ⅱ区)・SK37

北東から



3. SK33

北から



4. SK36

北から



5. SX03(Ⅰ区)

西から



6. SK62

北から



7. SK63

北から



8. SK64・65

東から



1. SX03(Ⅱ区)

北から



2. SX04・P 10

北から



3. SK01

北から



4. SK34

北東から



5. SK38(Ⅱ区)

北から



6. SK05

北東から



7. SK06・12

北東から



8. SK09・10

南東から



1. SK16

北から



2. SK21

北から



3. SK25

南東から



4. SK22

北から



5. SK28

南から



6. SK29・30(Ⅱ区)

北東から



7. SK53

西から



8. 作業風景(Ⅰ区)

西から



1. SB02

5図3



2. SB02

5図4



3. SB02

5図5



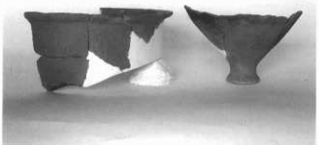
4. SB02

7図24



5. SB02

7図26



6. SB03

10図1・2



7. SK03

12図4・6・11



1. SB35

15 図 2・5



2. SB35

15 図 6



3. SB37

19 図 6



4. SB37

19 図 上 1・2 下 3



5. SB37

19 図 5・8



6. SK51

21 図 上 1・5 下 7・6



7. SB04

23 図 上 1・2 下 3・4



8. SB04

23 図 5・6



9. SB04

23 図 8・10



1. K 01



25 図 1



2. K 02

28 図 1・2



3. SK08

26 図 1



4. SK08

26 図 3 表



裏



5. SK46

33 図 4・6



6. SK58

36 図 7 表



裏



1. SK01

41 図 2・4

2. SK01

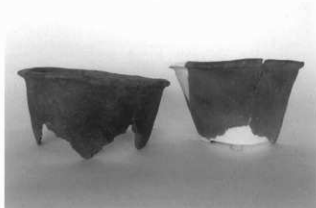


41 図 10



3. SK01

41 図 16



4. SK01

41 図 7・8



5. SK01

41 図 12・13



6. SK34

42 図 1・2・3



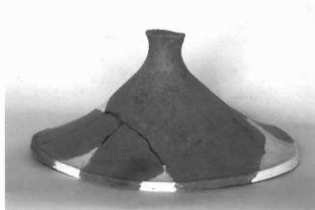
7. SK34

42 図 4・5



8. SK05

45 図前 6・7 奥 9・10



9. SK05

45 図 11



1. SK09



2. SK16



3. SK16

48 図 5



4. SK19・SK21

50 図 1・2



5. SK28

53 図 2・4



6. SK28

53 図 5・7



7. SK53

57 図 9



8. 出土遺構不明



58 図 2 9. 上 19 図 18・10 図 3 下 50 図 3・41 図 17

報告書抄録

ふりがな	やめしないいせきぐん13							
書名	八女市内遺跡群13							
副書名	福岡県八女市緒玉所在 水洗遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第120集							
編著者名	多賀 晴司 (たが せいじ)							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	〒834-8585 福岡県八女市本町647 TEL. 0943-23-1982 FAX. 0943-24-4331							
発行年月	西暦 2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
みずあらいいせき 水洗遺跡	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 おたまあざみずあらいい 緒玉字水洗	402109	6011	33° 11' 45"	130° 33' 04"	19890803 ～ 19900228	約2300㎡	圃場整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
水洗遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	竪穴建物・褒棺墓 円形周溝・溝 土坑 等		弥生土器・古式土師 器・石庖丁・砥石 等			
要約	水洗遺跡Ⅰ区・Ⅱ区の発掘調査では竪穴建物9軒(ほかに可能性があるもの2軒)、褒棺墓2基、円形周溝状遺構6基、溝状遺構4条、土坑73基、ほか多数の小穴が見つかった。時期は弥生時代前期末から中期と古墳時代前期である。至近距離に宿町遺跡、二反田遺跡・宮ノ前遺跡がある。前者は弥生時代前期末から中期前半の一重環壕が見つかり、当時期の中心的な集落と考えられ、また後者は弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺構が稠密に見つかった。当調査区は竪穴住居に切り合いがなく、比較的散漫に見つかることから、これらの集落の外縁に当たると考えられる。圃場整備にともない行われた緒玉から酒井田の集落の間での発掘調査を通してこの地域の歴史の一端が明らかになることに期待したい。							

※座標は世界測地系による。国土地理院ホームページの地図検索システムより得たものであり、基準点測量によって得た値ではない。

八女市内遺跡群 13
八女市文化財調査報告書
第120集

平成29年3月31日

発行 八女市教育委員会
八女市本町647
印刷 (株) 東兄弟
八女市祈祷院563